

太平記と知の形態——享楽・座談・解釈

Heikemonogatari and Taiheiki : Forms of Knowledge

葛 綿 正 一

KUZUWATA Masakazu

『太平記』については流布本の注釈が岩波古典大系（後藤丹治、釜田喜三郎、岡見正雄）や新潮古典集成（山下宏明）でなされ、天正本の注釈が小学館新古典全集（長谷川端）でなされた。また諸家による研究として『太平記の成立』（汲古書院、一九九八年）、『太平記の世界』（同、二〇〇〇年）、『論集太平記の時代』（新典社、二〇〇四年）、『太平記を読む』（吉川弘文館、二〇〇八年）などがある。それらの成果に学びつつ、本稿では『太平記』における知の形態といふべきものを『平家物語』と比較することで浮き彫りにしてみたいと思う〔1〕。

一 冒頭部分の比較——運命と国家

『平家物語』と『太平記』、まず名高い冒頭部分を比較してみよう。

祇園精舎の鐘の声、所行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。奢れる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。

（引用は岩波新古典大系による、覚一本『平家物語』）
蒙竊採古今之变化、察安危之所由、覆而無外天之德也。明君体之保国家。載而無棄地之道也。良臣則之守社稷。若夫其德欠則雖有位不持。所謂夏桀走南巢、殷紂敗牧野。其道違則雖有威不久。曾聽趙高刑咸陽、禄山亡鳳翔。是以前聖慎而得垂法於將來也。後昆顧而不取誠於既往乎。
（引用は岩波古典大系による、流布本『太平記』）

『平家物語』で問題となるのは盛者という個人である（そこには清盛の固有名が織り込まれている）。それに対して、『太平記』で問題となるのは国家であり社稷である。この相違は重要だと思われる。『平家物語』は平家という盛者の物語であり、『太平記』は君臣による国家の物語なのである。前者は単数の家の物語、あるいは源平という双数の家の物語に留まる。しかし、後者は複数の家の物語であり、しかも一つの家が内部分裂している。

『平家物語』が仏教的世界に位置づけられ、『太平記』が儒学的世界に位置づけられていることは、冒頭部分の比較から明らかであろう。前者にみられるのは運命論であり、滅亡はただ甘受するほかない。しかし、後者にみられるのは歴史論であり、歴史の教訓を守れば滅亡が回避できるのである。運命論の中の盛者は植物のように一箇所に留まって滅亡するほかない（都落ちはひたすら情動化される）。それに対して、歴史論の中の人物は漢籍という典拠に従い駒のように移動している。

『平家物語』は人間の運命を描き、『太平記』は国家というゲームを描く。近松門左衛門作の題名「碁盤太平記」は『太平記』の特質を言い当てた言葉であろう。『太平記』は碁盤の上で展開しているに等しいからである。卷二に「碁ノ手ニツイテ、截レト仰セラレケルヲ伝奏聞誤テ、コノ沙門ヲ截レトノ勅定ゾト心得テ、禁門ノ外ニ出シ、スナハチ沙門ノ首ヲ刎テンゲリ」とあるように、困碁の言葉が人の命を奪ってしまう。「四蹄ヲ縮ムレバ双六盤ノ上ニモ立チ、一鞭ヲ当ツレバ十丈ノ堀ヲモ越ツベシ」という龍馬が示唆するのは盤上から飛び出す存在ではないか（卷一三）。卷三八に「主ヲ何クヘモ落延サセン為ニ少モ驕タル気色ヲ不見、碁・双六・十服茶ナド吞テ、サリゲナキ体ニテ笑戯テ居タリケレ」とあるが、遊戯が行われるとき、実は大きなゲームが展開しているのである。以下、特徴的な局面とキャラクターに注目しつつ、そうした点を明らかにしてみたい〔2〕。

二 無礼講と談義 —— 解釈の場

『太平記』という作品の仕組みについて考えるとき、注目するべきは無礼講であろう。「能々其心ヲ窺見ン為」に始まった無礼講は、いわば『太平記』の「心」を垣間見せてくれるからである。

其交会遊宴ノ体、見聞耳目ヲ驚セリ。献盃ノ次第、上下ヲ云ハズ、男ハ烏帽子ヲ脱デ髻ヲ放チ、法師ハ衣ヲ不着シテ白衣ニナリ、年十七八ナル女ノ、盼形優ニ、膚殊ニ清ラカナルヲ二十余人、褊ノ単ヘ計ヲ着セテ、酌ヲ取セケレバ、雪ノ膚スキ通テ、大液ノ芙蓉新ニ水ヲ出タルニ異ナラズ。山海ノ珍物ヲ尽シ、旨酒泉ノ如クニ湛テ、遊戯舞歌フ。其間ニハ只東夷ヲ可亡企ノ外ハ他事ナシ。

(卷一)

淫らな誘惑と強い意志というか、体裁と企てのずれが『太平記』の特質なのである。無礼講と倒幕運動は無関係とする見解もあるが(河内祥輔『日本中世の朝廷・幕府体制』吉川弘文館、二〇〇六年)、『太平記』は両者を結びつける。バサラ狼藉と王道思想を描く『太平記』の二面性といつてよい。「褊」の一語はこの後、藤房の発言に出てくるけれども(「政道ノ不正ヲ褊シテ」)、行動は衣装に重なつていくようにみえる(3)。

其事ト無ク、常ニ会交セバ、人ノ思咎ムル事モヤ有ントテ、事ヲ文談ニ寄ンガ為ニ、其比才覚無双ノ聞ヘアリケル玄恵法印ト云文者ヲ請ジテ、昌黎文集ノ談義ヲゾ行セケル。彼法印謀反ノ企トハ夢ニモ不知、会合ノ日毎ニ、其席ニ臨デ玄ヲ談ジ理ヲ折。

(卷一)

企てを偽装するために談義が催されるが、こうした偽装は恥辱を理由に籠居し諸国を廻つた藤原俊基の挿話にもみられたものである(4)。しかし、偽装であつたはずの談義が真実を示しかねないことに気づく。

彼文集ノ中ニ、昌黎赴潮州ト云長篇有り。此処ニ至テ、談義ヲ聞人々、是皆不吉ノ書ナリケリ、呉子・孫子・六韜・三略ナンド社、可然当用ノ文ナレトテ、昌黎文集ノ談義ヲ止テゲリ。

(卷一)

偽装でしかないものが解釈によつて真実になる。これが『太平記』の厄介な魅力であり、『太平記』は解釈をし続ける装置なのである。卷二七「雲景未来記事」、卷三五「北野通夜物語事」を見れば、『太平記』が座談の文学であることは明らかであろう。未来記に対する正成の解釈や編者の解釈が記されている点で、卷六「正成天王寺未来記披見事」もまた一種の座談といえる。

『平家物語』は座談の文学ではない。俊寛の挿話のように座談はたちまち抑圧されてしまう(卷一「鹿谷」)。座談の論理よりも女性との縁戚関係のほうが重要である。俊寛の帰還が話題になるのも安産祈願のためでしかない(卷三「救文」)。卷三の「医師問答」をみると、重盛は医師を拒んで死去している。「未来の事をも、かねてさとり給けるに

や」と評される重盛だが、決して論理を徹底させはしない。

『平家物語』における女性の役割は大きい。祇園女御は清盛を産し、建礼門院徳子は出産と鎮魂という大きな役割を担う(「過去精霊、一仏浄土へといのらせ給ふこそ悲しけれ」灌頂卷)。『太平記』における女性の役割は小さい。後醍醐天皇の寵愛を受け阿波の内侍廉子は准后と呼ばれるが、出産や鎮魂が特筆されるわけでもない。「御前ノ評定、雑訴ノ御沙汰マデモ、准后ノ御口入トダニ云テゲレバ、上卿モ忠ナキニ賞ヲ与、奉行モ理有ヲ非トセリ」(巻一)。これをみると、『太平記』の女性は評定に口出しする役割にとどまる。

『平家物語』における安産祈願は文字通りのものだが、『太平記』における安産祈願は謀反の企てを意味する。女性の占める位置の大きな『平家物語』が情動優位だとすれば、解釈優位の『太平記』においては女性の占める位置が小さいであろう。「此事穴賢人二知サセ給フナ」と土岐頼員は妻に語るが、密事は漏れてしまう(巻一)。直義室の産は天狗の所為とみなされる(巻二五)。「是故二兵氣ハ不上ケリトテ、悉此女ヲ捕ヘテ、或ハ水ニ沈メ或ハ追失テ、後又高キ山ニ打上テ、御方ノ陣ヲ見ニ、兵氣盛ニ立テ敵ノ上ニ覆ヘリ」(巻三八)とあるように、女性の存在は合戦における障害と解釈される。

談義における昌黎の話は「昌黎悦デ馬ヨリ下、韓湘方袖ヲ引テ、泪ノ中ニ申ケルハ、先年碧玉ノ花ノ中ニ見ヘタリシ一聯ノ句ハ、汝我ニ予左遷ノ愁ヲ告知セルナリ。今又汝爰ニ来レリ。料リ知ヌ、我遂ニ謫居ニ愁死シテ、帰事ヲ得ジト。再会期無シテ、遠別今ニアリ。豈悲ニ堪シヤトテ、前ノ一聯ニ句ヲ継デ、八句一首ト成シテ、韓湘ニ与フ」と続く。『平家物語』で和歌が情動を掻き立てるのに対して、『太平記』では漢詩が知的な解釈を導くのである。平曲が「あはれなり」という情動を掻き立てるとすれば、太平記読みは知的な解釈を導く。

三 田楽と鬪犬——解釈の対象

北条氏滅亡の前兆とみなされるのは田楽と鬪犬だが、田楽は天の領域、鬪犬は地の領域に位置づけられている。一方は星や鳥と結びつき、他方は人や犬と結びつくからである。

何クヨリ来トモ知ヌ、新坐・本坐ノ田楽共十余人、忽然トシテ坐席ニ列テゾ舞歌ヒケル。其興甚尋常ニ越タリ。暫有テ拍子ヲ替テ歌フ声ヲ聞ケバ、天王寺ノヤヨレボシヲ見バヤ、トゾ拍子ケル。或官女此声ヲ聞テ、余ノ面白サニ障子ノ隙ヨリ是ヲ見ルニ、新坐・本坐ノ田楽共ト見ヘツル者一人モ人ニテハ無リケリ。或嘴勾テ鴉ノ如クナルモアリ、或ハ身ニ翅在テ其形山伏ノ如クナルモアリ。

(卷五)

どこから来たかわからない田楽師たちが突然、出現し消失する。「ヨウレボシ」は儒学者によつて妖霊星と解釈され、不吉な前兆となる。しかも「天王寺ハ是仏法最初ノ霊地ニテ、聖徳太子自日本一州ノ未来記ヲ留給ヘリ。サレバ彼媚者ガ天王寺ノ妖霊星ト歌ヒケルコソ怪シケレ」として未来記に関連づけられる。『平家物語』巻一で吉兆とされたのは「鱸」だが、その場合、解釈するというよりも直接食べることで出世が実現していた。ここでは声を放つ田楽師たちと噛み合う犬たちの対比が興味深い。

月二十二度犬合セノ日トテ被定シカバ、一族大名御内外様ノ人々、或ハ堂上ニ坐ヲ列ネ、或庭前ニ膝ヲ屈シテ見物ス。于時兩陣ノ犬共ヲ、一二百疋充放シ合セタリケレバ、入り違ヒ追合テ、上ニ成下ニ成、噉合声天ヲ響シ地ヲ動ス。心ナキ人ハ是ヲ見テ、アラ面白ヤ、只戦ニ雌雄ヲ決スルニ不異ト思ヒ、智アル人ハ是ヲ聞テ、アナ忌々シヤ、偏ニ郊原ニ戸ヲ争フニ似タリト悲メリ。

(卷五)

闘犬をめぐる人々の動きはまさに下剋上を思わせるが、ある人は「アラ面白ヤ」という享楽を見出し、ある人は「偏ニ郊原ニ戸ヲ争フニ似タリ」と解釈する。ここからも『太平記』における解釈の重要性が見て取れるだろう。

田楽の記事は卷二七に再び登場し、その不吉さを強調している。「今年多ノ不思議打統中ニ、洛中ニ田楽ヲ翫フ事法ニ過タリ」。そして棧敷の崩壊が記される。

大物ノ五六ニテ打付タル棧敷傾立テ、アレヤアレヤト云程コソアレ、上下二百四十九間、共ニ将基倒ヲスルガ如ク、一度ニ同トゾ倒ケル(中略)修羅ノ鬪諍、獄率ノ呵責、眼ノ前ニ有ガ如シ。梶井宮モ御腰ヲ打損ゼサセ給ヒタリト聞ヘシカバ、一首ノ狂歌ヲ四条川原ニ立タリ。(中略)又ニ條関白殿モ御覧ジ給ヒタリト申ケレバ、

田楽ノ将基倒ノ棧敷ニハ王許コソ登ラザリケレ

(卷二七)

「将基倒」とあるように、まさに世界がゲームとみなされている点に注目したい。千刃破城合戦でも「将基倒」が

みられた。「城ノ中ヨリ、切岸ノ上ニ横ヘテ置タル大木十計切テ落シ懸タリケル間、将基倒ヲスル如ク、寄手四五百人庄ニ被討テ死ニケリ」(巻七)。合戦と田楽には転倒という共通点が存在している。正成の作る藁人形は田楽の演出のようにみえる。城中で話題にしているのは双六ゲームの結末である(或時遊君ノ前ニテ双六ヲ打レケルガ、賽ノ目ヲ論ジテ聊ノ詞ノ違ヒケルニヤ、伯叔甥二人突違テゾ死レケル)。巻二〇「八幡炎上事」にも「将棋倒」がみられるだろう。「寄手数数万ノ兵共、此大石ニ打レテ将棋倒ヲスルガ如、一同ニ谷底ヘコロビ落ケレバ」。

田楽が『太平記』の音を代表するとすれば、『平家物語』の音を代表するのは笛ではないだろうか。敦盛最期の挿話には「あな、いとほし。この晝、城の内にて管弦したまひつるは、この人々にておはしけり。当時、味方に東国の勢何万騎があるらめども、いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈はなほもやさしかりけり」と語られていた。盲人の琵琶よりも貴人の笛である。「狂言綺語の理といひながら、つひに讚仏乗の因となるこそあはれなれ」と語るように、『平家物語』の狂言綺語は仏教によって救済される。しかし、『太平記』のバサラ狼藉は救済されないことがない。

三 後醍醐天皇と大塔宮 —— 清盛・重盛との比較

『太平記』の後醍醐天皇は『平家物語』の平清盛と比較できる。ともに作品の中心人物だからである。しかし、清盛は運命を体現する盛者だが、後醍醐天皇は国家と一体ではありえず、国家の一部にすぎない。

訴訟ノ人出来ノ時、若下情上ニ達セザル事モヤアラントテ、記録所へ出御成テ、直ニ訴ヲ聞召明メ、理非ヲ決斷セラレシカ：

(巻一)

後醍醐天皇の治世では裁判が重視される。後醍醐天皇は独裁の人というよりも裁判の人であり、議論を巻き起こす人なのである。『太平記』作者も「惟恨ラクハ斉桓覇ヲ行、楚人弓ヲ遣シニ、叡慮少キ似タル事ヲ。是則所以草創雖并一天守文不越三載也」と議論に加わっている。清盛が独裁者として振る舞うのに対して、後醍醐はいつも不如意に振る舞わざるをえない。「サシテ行笠置ノ山ヲ出シヨリアメガ下ニハ隱家モナシ」と詠んでいる(巻三)。「イカニセシ憑ム陰トテ立ヨレバ猶袖ヌラス松ノ下露」と詠む藤房は後醍醐に仕えたばかりに混乱に巻き込まれる。

誰も議論に終止符を打つことができないというのが『太平記』の世界であらう。

藤房請取之糺忠否分深淺、各申与ントシ給ヒケル処ニ、依内奏秘計、只今マデハ朝敵ナリツル者モ安堵ヲ賜リ、更ニ無忠輩モ五箇所・十箇所ノ所領ヲ給ケル間、藤房諫言ヲ納カネテ称病被辞奉行。(巻一二)

鎌倉幕府を倒し「公家一統政道」が始まるが、早速、恩賞をめぐる混戦が起ころ。決断所を設置しても混戦は止まない。「是尚理世安国ノ政ニ非リケリ。或ハ内奏訴人蒙勅許ヲ、決断所ニテ論人ニ理ヲ被付、又決断所ニテ本主給安堵、内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被行。如此互ニ錯乱セシ間、所領一所ニ四五人ノ給主付テ、国々ノ動乱更ニ無休時」。巻一「関所停止事」にあつた通り、後醍醐は流通を開いてしまったのであり、そのことが下剋上を進展させる。

後醍醐天皇と大塔宮の関係においては親子の情愛よりも国家経営のほうが優先されている。大塔宮は重盛と違つて、父親を制止するような息子ではない。天台座主でありながら、軍事教練に熱中し、父親に逆らつて征夷大將軍となる。後醍醐が解積を掻き立てる存在だとすれば、大塔宮は解積を断ち切る存在といえる。もっぱら武力を行使しようとするからである。「御心ノ儘ニ極修、世ノ譏ヲ忘テ淫楽ヲノミ事トシ給シカバ、天下ノ人皆再ビ世ノ危カラン事ヲ思ヘリ(中略) 刺加様ノソラガラクル者共、毎夜京白河ヲ廻テ、辻切ヲシケル程ニ、路次ニ行合フ児法師・女童部、此彼ニ被切倒、逢横死者無休時。是モ只足利治部卿ヲ討ント被思召ケル故ニ、集兵被習武ケル御拳動也」(巻一二)。大塔宮は巴萨ラ的でゲリラ的な一面を有している。「宮は熊野にもおはしましけるが、大峯を伝ひて、吉野にも高野にもおはしまし通ひつつ、さりぬべきくまぐまにはよく紛れものし給て、たけき御有様のみあらはし…」と神出鬼没の様子を記すのは『増鏡』巻一六である。

尊氏の讒言によつて大塔宮は馬場殿に閉じ込められ、鎌倉に送られることになるが、巻五の挿話と対比できるだらう。すなわち、大塔宮が経箱に隠れ危機を脱出する挿話である。

御経ヲ皆打移シテ見ケルガ、カラカラト打笑テ、大般若ノ櫃ノ中ヲ能々捜シタレバ、大塔宮ハイラセ給ハデ、大唐ノ玄奘三蔵コソ坐シケレト戯レケレバ、兵皆一同ニ笑テ門外ヘゾ出ニケル。(巻五)

櫃の中に入っていたのは大塔宮ではなく経典であつた。兵士たちは意味を解釈することなく、音を短絡させ「カラカラ」と笑っている。最初、兵士たちは閉じられた櫃に目を奪われてしまう。大塔宮は開けられた櫃の経典に紛れて

いたが、これは大塔宮が天台座主として過ごしてきたことに対応している。次に兵士たちは開いていた櫃を確認する。しかし大塔宮はすでに閉じられた櫃に移動している。見事な機敏さで熊野へと脱出するのである〔5〕。

解釈の箱において意味と享楽がすれ違ふ。享楽に囚われるときは盲目となるのだが、そんな箱に櫃のテーマは『太平記』に幾度も垣間見られる。地頭の幼児は何も知らず「鎧唐櫃」に入れられ淵に身を沈める（巻一一「越前牛原地頭自害事」）。本物かどうか何度も確認された後、「朱ノ唐櫃」に入れられるのは義貞の首である（巻二〇「新田自害事」）。上山が「走寄テ、唐櫃ノ緒ヲ引切テ鎧ヲ取テ肩ニ打懸ケル」と若党に阻止される。しかし鎧を許された喜びに満たされ上山は師直に代わり討たれるのである（巻二六「上山討死事」）。「綱此手ヲ取テ頼光ニ奉ル。頼光是ヲ秘シテ、朱ノ唐櫃ニ取テ置レケル後、夜々ヲソロシキ夢ヲ見給ケル」；こうして腕を切り取られた鬼は唐櫃の中身を死にもぐるいで奪いにやつて来る（巻三二「鬼丸鬼切事」）。見つからぬよう「長唐櫃ノ底ニ穴ヲアケテ氣ヲ出シ、其櫃ノ中ニ臥サセテ」脱出するのは畠山兄弟の弟である（巻三八「畠山兄弟修禪寺城楯籠事」）。

巻二の「両使已ニ京着シテ、未文箱ヲモ開ヌ先ニ、何トカシテ聞ヘケン、今度東使ノ上洛ハ主上ヲ遠国ヘ遷進セ、大塔宮ヲ死罪ニ行奉ン為也」というところから始まって大塔宮にとって箱は危ういものなのだが、大塔宮が殺されるのは、そうした移動が不可能なときにほかならない。直義は大塔宮がどの土籠にいるかすでに知っており、鎌倉の混乱に乗じて殺害してしまうのである。「明キ所ニテ御頸ヲ奉見、噬切ラセ給ヒタリツル刀ノ鋒、未ダ御口ノ中ニ留テ、御眼猶生タル人ノ如シ。淵邊是ヲ見テ、サル事アリ、加様ノ頸ヲバ、主ニハ見セヌ事ゾトテ、側ナル數ノ中ヘ投捨テゾ歸リケル」（巻一三）。この投げ捨てられた首こそ不気味であろう。なぜなら、誰のものかわからない匿名の首になつてしまふからである。ゲリラ化された首といつてもよいが、もはや貴種の首ではなく『太平記』に出てくる無数の首と混じり合う。

巻八には首が増えていく挿話が出てくる。「軍モセヌ六波羅勢ドモ、我レ高名シタリト云ントテ、洛中・辺土ノ在家人ナンドノ頸飯首ニシテ、様々ノ名ヲ書付テ出シタリケル頸共也。其中ニ赤松入道円心ト札ヲ付タル首五アリ。何レモ見知タル人無レバ、同ジヤウニゾ懸タリケル。京童部是ヲ見テ、頸ヲ借タル人、利子ヲ付テ可返、赤松入道分身シテ、敵ノ尽ヌ相ナルベシト、口々ニコソ笑ヒケレ」（巻八）。首の増加は利子とみなされており、この笑話は流通の

発達、商工業の発達に対応している。「山崎・八幡二陣ヲ取、河尻ヲ差塞ギ西国往反ノ道ヲ打止ム。依之洛中ノ商売止テ士卒皆転漕ノ助ニ苦メリ。両六波羅聞之、赤松一人ニ洛中ヲ被悩テ」とある通り、流通と赤松のかかわりは深い。日野資朝の息子、阿新が佐渡を脱出する物語は流通の挿話として読み解くことができる。「堀ヲ飛越ントシケルガ、口二丈深サ一丈ニ余リタル堀ナレバ、越ベキ様モ無リケリ。サラバ是ヲ橋ニシテ渡ンヨト思テ、堀ノ上ニ末ナビキタル呉竹ノ梢ヘサラサラト登タレバ、竹ノ末堀ノ向ヘナビキ伏テ、ヤスヤスト堀ヲバ越テゲリ」(卷二)。永積安明『太平記』が示唆するようにゲリラ的な世界に近いが(自ら武器を持たず相手の武器を利用するのはゲリラの身振りであろう)、脱出した話がまさに流通している。「サラサラ」「ヤスヤス」はその流通ふりに対応する。

後醍醐天皇は裁判の人であり、議論を掻き立てる存在だと述べたが、その「横言」によって世の中は上下に混乱する。次の落首が示すように、後醍醐の言葉は虚言としてしか機能しない。

賢王ノ横言ニ成ル世中ハ上ヲ下ヘゾ婦シタリケル

(卷一四)

カク計タラサセ給フ論言ノ汗ノ如クニナドナカルラン

(卷一四)

網野善彦『異形の王権』(平凡社、一九八六年)は後醍醐を異形の王権と名付けている。しかし、むしろ議論を呼び起こす「横言」の王権である。八幡大菩薩、天照皇大神、春日大明神を並べた肖像画をみると、それぞれの関係をめぐって議論を呼び起こさずにはいない。『梅松論』に「今の例は昔の新儀也、朕が新儀は未来の先例たるべし」という後醍醐の言葉が出てくるが、「先例」の根拠を掘り崩している。「先例」も所詮は「新儀」にすぎず、何ら根拠をもたないことが明らかになるからである。「未来の先例たるべし」という意志だけが唯一の根拠であり、「未来」とは現在の意志が思い描く願望に等しい。

卷八に「船上ノ皇居ニ壇ヲ被立、天子自金輪ノ法ヲ行ハセ給フ」とあるが、その火が燃え広がっていく。「風」を旗印とした千種忠顕の攻撃は「天魔波旬」の所為とされ、「谷堂炎上」をもたらず。『増鏡』も「六月ばかりいみじう暑き程に、壇ども軒をさしりて、護摩の煙みちみちたるさま、いとおどろおどろしきまでけぶたし」と強調していた(卷一五)。後醍醐の手印、その鮮やかな「朱」と共鳴している(『四天王寺御手印縁起』)。

足利方の策略に乗せられ京都に帰還しようとする後醍醐天皇を描くのが卷一七である。細切れにして兵士たちに

配布する「紅ノ御袴」が印象深い。「今ノ洛中教箇度ノ戦ニ、朝敵勢盛ニシテ官軍頻ニ利ヲ失ヒ候事、全戦ノ咎ニ非ズ、只帝徳ノ欠ル処ニ候歟。依御方ニ参ル勢ノ少キ故ニテ候ハズヤ。詮スル所当家累年ノ忠義ヲ被捨テ、京都へ臨幸可成ニテ候ハバ、只義貞ヲ始トシテ当家ノ氏族五十余人ヲ御前へ被召出、首ヲ刎テ：」と新田方の武将が抗議しているが、ここでも後醍醐は議論を引き起す。

『平家物語』における清盛の最期は悪人の運命にふさわしい。だが、「清盛公は悪人こそ思へども、まことは滋惠僧正の再誕なり」と救済が用意されていた（巻六）。それに対して、左手に法華経、右手に刀剣をもった後醍醐の最期は救済を拒むものである。崩御の挿話は道誓と師直のバサラ挿話に挟まれ、炎上と猛火の挿話の間で「燈」が消えているが（巻二二）、その余燼は止むことがない。「二年二月四日、俄ニ失火出来テ院御所持明院殿焼ニケリ。回禄ハ天災ニテ尋常有事ナレ共、近年打続キ京中ノ堂社・宮殿残少ク焼失ヌル事直事トモ不覚、只法滅ノ因縁王城ノ衰微トゾ見ヘタリケル。元弘・建武ノ乱ヨリ以来回禄ニ逢ヌル所々ヲ数レバ、先内裏・馬場殿・准后ノ御所：」と続く（巻三二）。

四 藤房と正成——重盛・知盛との比較

『太平記』の万里小路藤房は『平家物語』の平重盛と比較できるだろう。ともに教訓や諫言を述べる人物だからである。しかし、重盛の教訓はもっぱら恩愛にかかわるものであつて、政治にかかわるものにはみえない。清盛が後白河院を幽閉しようとするので、重盛は涙を流す。

大臣聞きもあへず、はらはらとぞ泣かれける。入道、いかにいかにとあきれ給ふ。大臣涙をおさへて申されけるは、此仰承候に、御運ははや末になりぬと覚候。人の運命の傾かんとては、必悪事を思ひ立ち候也。

（巻二）

清盛と血縁にある重盛の発言では親子の問題や孝行の問題が重視される。「まづ世に四恩候、天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩、是也。其なかに尤重きは朝恩也」と語っているように、政治でさえも朝恩という恩義の問題なのである。だが、藤房が問題とするのは政道であつて、恩愛ではない。

今政道正カラザルニ依テ、房屋ノ精、化シテ此馬ト成テ、人ノ心ヲ蕩カサントスル者也。(中略) 未恩賞ヲ給タル者アラザルニ、申状ヲ捨テ訴ヲ止タルハ、忠功ノ不立ヲ恨ミ、政道ノ不正ヲ編シテ、皆己ガ本国ニ帰ル者也。(中略) 今ノ政道、只抽賞ノ功ニ不当譏ノミニ非ズ。兼テハ綸言ノ掌ヲ翻ス憚アリ。(中略) 抑天馬ノ用所ヲ案スルニ、徳ノ流行スル事ハ郵ヲ置テ命ヲ伝ルヨリモ早ケレバ、此馬必シモ不足用。

(卷一三)

藤房は天皇に進上された龍馬を凶悪と解釈している。徳の流行に比較すれば、龍馬は無用の長物だという。馬はまさに国家経営というゲームを左右しかねない駒である。

卷三に「藤房卿勅ヲ奉テ、急ギ楠正成ヲ召ケル」と記されるが、藤房が出自の明解な人物であるのに対して、正成は出自の不明な人物である。どこから来たかわからないように『太平記』は書いている(その意味では「何クヨリ来トモ知ヌ」とあった田楽師に似ている)。藤房は有縁の人物であり、正成は無縁の人物である。無縁の正成は夢の解釈を通して現れる。

天下草創ノ功ハ、武略ト智謀トノ二ニテ候(中略) 合戦ノ習ニテ候ヘバ、一旦ノ勝負ヲバ必シモ不可被御覽。正成一一人未ダ生テ有ト被聞召候ハバ、聖運遂ニ可被開ト被思食候ヘト、頼シゲニ申テ、正成ハ河内ヘ帰ニケリ。

(卷三)

一度では決着が付かず何度でも戦い続けなければならない、それが『太平記』の世界である。生きていくという噂さへあれば勝利できると断言している。赤坂城で熱湯を注ぎかける正成は灼熱の男だが(「熱湯ノ湧翻リタルヲ酌デ懸タリケル：熱湯身ニ徹テ焼爛ケレ：」)、単純な武力の人ではなく、知謀の人である(「6」)。

卷六には「去年赤坂ノ城ニテ自害シテ、焼死タル真似ヲシテ落タリシ」と偽装が記されている。湯浅氏の城を陥落させた作戦も興味深い。「兵ヲ二三百人兵士ノ様ニ出立セテ、城中ヘ入ントス。楠ガ勢是ヲ追散サントスル真似ヲシテ、追ツ返ツ同士軍ヲゾシタリケル。湯浅入道是ヲ見テ、我兵根入ルル兵共ガ、楠ガ勢ト戦フゾト心得テ、城中ヨリ打テ出デ、ソゾロナル敵ノ兵共ヲ城中ヘゾ引入ケル」。合戦を偽装することで、城内潜入を果たすのである。「正成天王寺未来記披見事」にみえる通り、正成は未来記さえ解釈できる存在にはかならない。

卷一五では律僧を派遣し、自らの死を演出している。「余ニアラマホシサニ、此二面影ノ似タリケル頭ヲ二ツ獄門

ノ木ニ懸テ、新田左兵衛督義貞・楠河内判官正成ト書付ヲサラレタリケルヲ、如何ナルニクサウノ者カシタリケン、其札ノ側ニ、是ハニタ預也、マサシゲニモ書ケル虚事哉ト、秀句ヲシテゾ書副テ見セタリケル」。正成の偽首は言葉ヲ短絡させ秀句を呼び寄せるのである。

卷一六、湊川の合戦で敗北した正成が切腹する場面をみてみよう。

正成座上ニ居ツツ、舎弟ノ正季ニ向テ、抑最期ノ一念ニ依テ、善悪ノ生ヲ引トイヘリ、九界ノ間ニ何カ御辺ノ願ナルト問ケレバ、正季カラカラト打笑テ、七生マデ只同ジ人間ニ生レテ、朝敵ヲ滅サバヤトコソ存候ヘト申ケレバ、正成ヨニ嬉シゲナル気色ニテ、罪業深キ悪念ナレ共我モ加様ニ思フ也。イザサラバ同ク生ヲ替テ此本懐ヲ達セント契テ、兄弟共ニ差違テ、同枕ニ臥ニケリ。

(卷一六)

何度でも同じことを繰り返すというのが正成の本懐である。「カラカラ」笑いに注目したい。これは解釈を突き放すような笑いであり、北条一門自害の場面に通じるものがある。「思指申ゾ。是ヲ看ニシ給ヘトテ左ノ小脇ニ刀ヲ突立テ、右ノ傍腹マデ切目長ク搔破テ、中ナル腸手繰出シテ道準ガ前ニゾ伏タリケル。道準盃ヲ取テ、アハレ肴ヤ、何ナル下戸ナリ共此ヲノマヌ者非ジト戯テ：」（卷一〇）。こうした自死は生命を快く保存する快樂ではない。むしろ生命を失うほど激しい享樂といふべきものであらう。

「疑ハ人ニヨリテゾ残リケルマサシゲナルハ楠ガ頸」の歌によれば、正成が亡くなったかどうかは疑わしい。卷二三では大森彦七の前に正成の亡霊が現れる（正成は「七頭ノ牛」に乗っており、「七」の論理がすべてを導く）。猿樂の場面は亡霊出現にあさわしいようにみえる。

猿樂ハ是遐齡延年ノ方ナレバトテ、御堂ノ庭ニ棧敷ヲ打テ舞台ヲ布、種々ノ風流ヲ尽サントス。近隣ノ貴賤是ヲ聞テ、群集スル事多シ。

(卷一三)

猿樂に加わろうとした彦七の前に美女が現れ、彦七が背負うと、鬼に変貌する〔7〕。まさに目の前で猿樂が演じられる趣があり、『太平記』と猿樂の同時代性がうかがえる。

彦七聞モ不敢庭ヘ立出テ、今夜ハ定テ来給ヌラント存ジテ、宵ヨリ奉待テコソ候ヘ。初ハ何共ナキ天狗・化物ナドノ化シテ候事ゾト存ゼシ間、委細ノ問答ニモ及候ハザリキ。今儘ニ繪旨ヲ帶シタルゾト奉候ヘバ、サテハ子細

ナキ楠殿ニテ御座候ケリト、信ヲ取テコソ候へ。事長々シキ様ニ候へ共、不審ノ事共ヲ尋ヌルニテ候。(卷二三)
問答の一夜に続くのは囲碁、双六の一夜である。つまり、囲碁や双六は問答の等価物といえるだろう。

其次ノ夜モ月陰風悪シテ、怪シキ気色ニ見ヘケレバ、警固ノ者共大勢遠侍ニ並居テ、終夜睡ラジト、碁双六ヲ打テ遊ビケル。(卷二三)

卷七「千劍破城軍事」の「大将ハ下知ニ随テ、軍勢皆軍ヲ止ケレバ、慰ム方ヤ無リケン、或ハ碁・双六ヲ打テ日ヲ過シ、或ハ百服茶・褒貶ノ歌合ナンドヲ翫デ夜ヲ明ス」という一節によれば、囲碁は合戦の等価物でもある。城を囲む軍勢は「見物相撲ノ場ノ如ク」であつた。

もちろん、善人とされる重盛が亡霊になることはない。『平家物語』の知盛は「見るべき程の事は見つ」の言葉で名高いが(卷一一)、こうした言葉を『太平記』の人物は誰も口にできない。なぜなら、何一つ終わりが訪れないからである。『平家物語』と違って終わりは存在せず、『太平記』の正成は永遠に戦い続けなければならない。

五 からから笑い —— 享樂と物

『平家物語』の平知盛にも豪放で享樂的な一面を見て取ることが出来る。「女房達、中納言殿、いくさはいかにや、いかにと口々にとひ給へば、めづらしきあづま男をこそ御らんぜられ候はんずらめとて、からからとわらひ給へば、なんでうのただいまのたはぶれぞやとて、声々にをめきさけび給ひけり」(卷一一「先帝身投」)。合戦とは東男を見ることが出来るのは一瞬、虚を突くような発言であり、この後、感情の爆発がやってくる。しかし、覚一本『平家物語』を見る限り、「からから」笑いの用例はこれだけである。

それに対して、『太平記』の用例は多く、いずれにも共通するところがある。それは短絡による享樂であり、物への同化である。からから笑いに共通するのは意味の解釈ではなく、むしろ言葉の短絡であるう。「快美是ヲ見テカラカト打笑テ、心得ヌ物哉、御辺達ハ敵ノ首ヲコソ取ランズルニ、御方ノ首ヲホシガルハ武家自滅ノ瑞相顕レタリ、ホシカラバ、スハ取ラセント云儘ニ、持タル海東ガ首ヲ敵ノ中ヘガハト投懸…」(卷二「唐崎浜合戦事」)。味方の首

を欲しがっているというのは一瞬、意味を宙吊りにする短絡である。そして、感情の爆発とともに投げつけられた首が物質として突出する〔8〕。

「武部七郎、妻鹿方鎧ノ上帯ヲ踏テ肩ニ乗揚リ、一匆勿テ向ノ岸ニゾ着ケル。妻鹿カラカヲ笑テ、御辺ハ我ヲ橋ニシテ渡タルヤ、イデ其屏引破テ捨シ……」(巻九「六波羅攻事」)。自らを橋にして渡るといふのも一瞬、意味を宙吊りにする短絡である。そして、感情の爆発とともに倒された塀が物質として突出する。

「野伏共カラカヲ笑テ、如何ナル一天ノ君ニテモ渡ラセ給へ、御連已ニ尽テ、落サセ給ハンズルヲ、通シ進ラセントハ申マジ、輒ク通り度思食サバ、御伴ノ武士ノ馬物具ヲ皆捨サセテ、御心安ク落サセ給ヘト云モハテズ、同音ニ時ヲドツド作ル」(巻九「主上・上皇御沈落事」)。天皇でいらつしやるけれども(「渡ラセ給」)、渡らせないというのは一瞬、意味を宙吊りにする短絡である。欲望を剥き出しにして武器を所望する。だが、中吉弥八は銭の隠し場所を教えると称して野伏を六波羅の焼け跡に連れ出し、「空笑」を返すのである。

「大手ヲハダケテ馳懸ル。長崎遙ニ見テ、カラカヲト打笑テ、党ノ者共ニ可組バ、横山ヲモ何カハ可嫌、逢ヌ敵ヲ失フ様、イデイデ己ニ知セントテ、為久ガ鎧ノ上巻摺テ中ニ提ゲ、弓杖五杖計安タト投渡ス」(巻一〇「長崎高重最期合戦事」)。ふさわしくない相手と戦うというのも一瞬、意味を宙吊りにする短絡である。そして、感情の爆発とともに武器が物質として突出するのである。

第二部の用例をみてみよう。「物具脱デ降人ニ參レトゾカケタリケル。備後守是ヲ聞テ、カラカヲト打笑ヒ、聞モ習ハヌ言バ哉、降人ニ可成ハ、筑紫ヨリ將軍ノ、様々ノ御教書ヲ成シテスカサレシ時コソ成ンズレ……」(巻一六「備中福山合戦事」)。「聞モ習ハヌ言バ哉」と言葉の解釈を拒絶し、まさに「物具」と一体になる。とつくに降参していたというのは一瞬、意味を宙吊りにする短絡である。「時二道過ル人是ヲ聞テ／將門ハ米カミヨリゾ斬ラレケル俵藤太ガ謀ニテ／ト読タリケレバ、此頭カラカヲト笑ヒケルガ、眼忽ニ塞テ、其戸遂ニ枯ニケリ」(巻一六「日本朝敵事」)。米と俵という言葉の短絡が意味を笑い飛ばし、屍を物質として際立たせている。

「熊野人共ノ真黒ニ裹ツレテ攻上ケルヲ、遙ニ直下シ、カラカヲト打笑ヒ、今日ノ軍ニ御方ノ兵ニ太刀ヲモ抜セ候マジ、矢一ヲモ射サセ候マジ、我等二人罷向テ、一矢仕テ奴原ニ肝ツツサセ候ハント申、最閑ニ座席ヲゾ立タリケル」(巻

一七「山攻事」。味方に戦鬪をさせないというのは一瞬、意味を宙吊りにする短絡であり、本間と相馬は静かに座席を立て物質的な沈黙をもたらすのである。「此童カラカヲ打笑テ、我和光ノ塵ニ交ル事久シテ、三世了達ノ智モ浅ク成ヌトイヘ共、如來出世ノ御時會座ニ列テ聞シ事ナレバ、アラアラ云テ聞カセントテ：」（同）。ここでは童子が高度な理論を語ることで、常識的な解釈を笑い飛ばしている。

瀕死の老人も常識的な解釈を笑い飛ばす。「此入道已ニ目ヲ塞ントシケルガ、カツパト跳起テ、カラカヲ打笑ヒ、戦タル声ニテ云ケルハ、齡七旬ニ及デ、栄花身ニアキリヌレバ、今生ニ於テハ一事モ思殘事候ハズ、只今度罷上テ、遂ニ朝敵ヲ亡シ得スシテ、空ク黄泉ノタビニヲモムキヌル事、多生広劫マデノ妄念トナリヌト覚ヘ候：ト、是ヲ最後ノ詞ニテ、刀ヲ抜テ逆手ニ持チ、断齒ヲシテゾ死ニケル」（卷二〇「結城入道墮地獄事」）。吉野から奥州に向かったものの難破し重病となった結城入道は善意の解釈を拒絶し、悪相によって享樂を尽くすのである（地獄に墮ちた結城入道の苦患を旅僧が語るところは夢幻能のようだ）。土岐頼遠の狼藉も同様であろう。「頼遠醉狂ノ氣ヤ萌シケン、是ヲ聞テカラカヲ打笑ヒ、何ニ院ト云フカ、犬ト云カ、犬ナラバ射テ落サント云儘ニ：」（卷二三「土岐頼遠參合御幸致狼藉事」）。院と犬という言葉の短絡で意味や解釈を笑い飛ばし、犬追物のごとく光嚴院に矢を射るのである。頼遠の挿話は年次を乱しているようだが、狼藉は時間感覚まで狂わせている。

第三部の用例をみてみよう。「蓬クモ敵ニ後ヲ見セラルル哉ト、言ヲ懸テ恥シメケレバ、長山屹トフリ返テカラカラト打笑テ、問フハ誰トヨ、赤松彈正少弼氏範ヨ、サテハヨイ敵、但只一打ニ失ハンズルコソカハユケレ、念仏申テ西ヘ向ヘトテ、件ノ鉞ヲ以テ開キ：」（卷三一「山名右衛門佐為敵事」）。恥という言葉に敏感に反応しているが、解釈を笑い飛ばし鉞の一撃へと全身を籠めるのである。「互ニ屹ト合眼シテ、南部ニ組ント相近付ク。南部尻目ニ見テ、カラカヲ打笑ヒ、物々シノ人々哉、イデ胴切テ太刀ノ金ノ程見セントテ、五尺六寸ノ太刀ヲ以テ開テ片手打ニシトト打」（卷三三「京軍事」）。ここでは相手の意図を笑い飛ばし、金属の一撃にすべてを托すのである。「楠ハ未河ヲ不越、和田ガ勢許僅ニ五百騎ニモ不足見ヘテ候ト牛飼童部共ノ語リケレバ、吉田肥前カラカヲ打笑テ、哀甘身ヤ、敵ノ種ヲバ此ニテ尽サスベシ、同ハ楠ヲモ河ヲ越サセテ打殺セトテ、最閑ニ馬ヲ飼テノサノサトシテゾ居タリケル」（卷三六「秀詮兄弟討死事」）。吉田敵覚は道譽の家臣にふさわしく牛飼の童の解釈を笑い飛ばし、「敵ノ種ヲバ此ニテ尽サスベシ」

と短絡させるのである。平然として馬と一体になっている。

短絡による解釈の拒絶と物への同化、これこそ死を厭わぬ享樂である。名高い『太平記』の落首もまた享樂の一種であろう。落首には文字通り、首が落ちる覚悟さえ見て取れる。「無人ノシルシノ卒塔婆堀棄テ墓ナカリケル家作哉」(巻二六)。実際、この落首の作者は師直に殺害されている。「無人ノシルシ」が我が身に降りかかってしまうのである。逆に落首によって追われる大名もいる。「御敵ノ種ヲ蒔置畠山打返スベキ世トハ知スヤ」、「何程ノ豆ヲ蒔テカ畠山日本国ヲバ味噌ニナスラン」、これらは畠山道誓を揶揄したもののだが、短絡が感情の爆発を生んでいる(巻三五)。

「エツボ」に入った笑いにも注目しておきたい(9)。「此聖其文ヲヤ知ザリケン、汝是畜生発菩提心トゾ唱タリケル。三河守友俊モ同ク此ニテ出家セントテ、既ニ髪ヲ洗ケルガ、是ヲ聞テ、命ノ惜サニ出家スレバトテ、汝ハ是畜生也ト唱給フ事ノ悲シサヨト、エツボニ入テゾ笑ケル」(巻九)。生命が危機にさられる、そのとき思わず笑いが吹き出すのである。敵の軍隊に囲まれたときの笑いも同様であろう。

或夜東寺ノ軍勢ドモ、樓門ニ上テ是ヲミケルガ、アラヲビタタシノ阿弥陀ガ峯ノ篝ヤ、ト申ケレバ、高駿河守ト
リモ敢ス

多ク共四十八ニハヨモ過ジ阿弥陀峯ニ灯ス篝火

ト一首ノ狂歌ニ取成シテ戯ケレバ、満座皆エツボニ入テゾ笑ケル。

(巻一七)

無数の火は敵の勢いを示す。宮方が勢いを増し武家方は疲れ果てている、そんな中で絶望的な笑いが生まれるのである。罰当たりな笑いといつてもよい。

覺錢、去バコソ汝等ガ打処ノ飛礫、全ク我身ニ中ル事不可有ト、少シ憍慢ノ心被起ケレバ、一ノ飛礫上人ノ御額
ニ中テ、血ノ色漸ニシテ見ヘタリケリ。サレバコソトテ、大衆共同音ニドツド笑ヒ、各院々谷々ヘゾ帰リケル。

(巻一八)

これは根来寺と高野山の対立を語る挿話だが、笑いと暴力が密接に繋がっていることを示す。巻一八ではもう一度「ドツト」笑いが起こる。

遙ノ沖ニ向テ、拳扇招キケルヲ、松浦ガ舟ニドツト笑声ヲ聞テ、安カラヌ者哉、其儀ナラバ只今ノ程ニ海底ノ龍

神ト成テ、其舟ヲバ遣マジキ者ヲト忿テ、腹十文字ニ搔切テ、蒼海ノ底ニゾ沈ケル。

(卷一八)

一宮御息所を奪われ笑われた秦武文は腹を切つて報復を図る。笑いは真つ直ぐ死に通じているのである。それゆえ逆に、笑いは死を弾き返す強さをもつ。

追懸レバ立止テ、嗚呼御刃達、痛ク近付テ頸ニ中違スナトアザ笑テ、件ノ金棒ヲ打振レバ、蜘蛛ノ子ヲ散スガ如ク颯トハ逃ゲ、又村立テ迹ニ集リ、鏃ヲ汰ヘテ射レバ、某ガ胄ニハ旁ノヘロヘロ矢ハヨモ立候ハジ、スハ此ヲ射ヨトテ、後ロヲ差向テゾ休ケル。

(卷二)

脇屋軍の篠塚はやすやすと四国から隠岐島へと脱出するのだが、笑いに満ちた傍若無人の振舞いはかえつて死を遠ざけている。乗船する篠塚の挿話は一宮御息所の挿話の悲惨さと対照的であり、むしろ阿新の挿話と同じ痛快さをもつ。

仁木義長の笑いをみてみよう。「紀伊国ノ軍ニ寄手若干討レテ、今ハ和佐山ノ陣ニモ御方怵ヘ難シト云タリケレバ、津々山ノ勢モ尼崎ノ大将モ、興ヲ醒シ色ヲ失フ。サレ共仁木右京大夫義長一人ハ、アラヲカシヤサテコソヨ、哀同ジクハ津々山・天王寺・住吉ノ勢共モ皆被追散、裸ニ成テ逃ヨカシ、興アル見物セントテ、エツボニ入テゾ咲ケル。是ヲバ御方トヤ云ベキ敵トヤ申スベキ。難心得所存也」(卷三四)。享楽においては敵も味方も存在しないのである。『太平記』において「エツボ」に入った笑いは三度繰り返されるが、それは武家に対立した公家の笑いであり(卷九)、官方に対立した武家の笑いであり(卷一七)、敵も味方も区別しない笑いである(卷三四)。

斯波道朝の家臣による笑いをみてみよう。「二宮、長坂峠ニ磬テ少モ漂ヘル機ヲ不見、馬ニ道草カフテ哈タル声ヲシニテ申ケルハ：我等ガ頸ヲ御引出物ニ進スルカ、御頸共饒ニ給ルカ、其二ノ間ニ自他ノ運否ヲ定メ候バヤト高声ニ呼テ、馬ノ上ニテ鎧ノ上帯縮直シテ、東頭ニ引ヘタリ。其勇氣誠ニ節ニ中テ、死ヲ軽ズル義有テ、前ニ可恐敵ナシト見ヘケレバ、数万騎ノ寄手共、ヨシヤ今ハ是マデゾトテ、長坂ノ麓ヨリ引返シヌ」(卷三九)。死を恐れぬ笑いが大軍を圧倒している。

『源平盛衰記』巻七に「鹿谷の評定の時、瓶子の倒れて頸を打折りたりけるを、平氏既に倒れたり、頸を取るには過ぎずとて、様々振舞ひたりければ、満座の人、この秀句を感じける」とあるが、秀句とは死と隣り合ったものでは

ないか。だからこそ、中世という時代において秀句が際立つのである。

六 道誉と師直 —— 排除される義貞と高貞

『平家物語』の平重盛と『太平記』の高師直を比較することもできる。ともに補佐する人物だからである。しかし、一方は善の人、他方はバサラ的な享楽の人といえる。師直は源氏の守り神である石清水八幡宮に火を放つことさえ厭わない(巻二〇)。

では『太平記』の中心人物、足利尊氏はどうか。尊氏は善の人でもなく享楽の人でもなく、解釈や享楽を受け入れる人物である。巻一三の結末に「サテコソ、尊氏卿ノ威勢自然ニ重ク成テ、武運忽ニ開ケケレバ、天下又武家ノ世トハ成ニケリ」とある通り、何の策略もなく自然に重みを増していく存在にみえる。『神皇正統記』が「サシタル大功モナクテ、カクヤハ抽賞セラルベキ」と批判するのも当然であろう。巻三三において背中の中腫れ物で亡くなる時にも「病日ニ随テ重クナリ」とあり、自然に重みを増している〔10〕。

尊氏はもっぱら運に助けられて生き延びる。「サレドモ將軍ノ御運ヤ強カリケン：梅酸ノ渴ヲゾ休メラレケル」(巻一五)、「義貞朝臣ハ、態鎧ヲ脱替ヘ馬ヲ乗替テ、只一騎敵ノ中ヘ懸入々々、何クニカ尊氏卿ノ坐ラン、撰ビ打ニ討ント伺ヒ給ヒケレドモ、將軍運強クシテ、遂ニ見ヘ給ハザリケレバ、無力其勢ヲ十方ヘ分テ、逃ル敵ヲゾ追ハセラレケル」。尊氏が九州を制覇するところにも「此全ク菊池ガ不覚ニモ非ズ、又直義朝臣ノ謀ニモ依ラズ、齋將軍天下ノ主ト成給フベキ過去ノ善因催シテ、靈神擁護ノ威ヲ加ヘ給シカバ、不慮ニ勝コトヲ得テ一時ニ靡キ順ケリ」とあって、「不慮」に勝っているにすぎない。義貞の挑発に対して、「將軍無力義者ノ諫ニ順フテ、忿ヲ押ヘテ坐シ給フ」というありさまである(巻一七)。玄慧法師に「比叡山開闢事」を語らせるのも師直であって、尊氏ではない(巻一八)。「是ゾハヤ將軍ノ御運尺ザル所ナレ」とあるように、新田軍の親子対立も尊氏に有利に働く(巻三二)。幽閉していた後醍醐天皇に逃げられたとき『梅松論』は「大敵の君を逃したてまつりて、御驚きもなかりしぞ、不思議の事と申し合ひける」と記しているが、驚くほどの平静さが尊氏の特徴といえる。

尊氏を追い詰めたにもかかわらず討ち漏らす新田義貞は、『太平記』において影の薄い存在である（「サセルコトナクテ、空シクサヘナリト聞エシカバ、云フバカリナシ」と記す『神皇正統記』においても影は薄い）。正成が夢を通して後醍醐天皇に近づくのに対して、義貞は綸旨を手に入れてから近づく（巻七）。しかも、野伏の協力でようやく手に入れた綸旨が偽物であることを知らない。バサラたちの火の挿話とは対照的だが、稲村ヶ崎が干潟になる場面でも律儀に折っている印象である（巻一〇）。バサラや座談や未来記と縁のない律儀で鈍重な義貞は反・享楽的人物であり、だから活躍の場が乏しいのである。かろうじて巻一四「新田足利確執奏状事」においてのみ義貞が勝っているようである。「例ノ新田ノ長僉議」と批判され（西源院本など）、「円心城ヲ拵スマシテ、当国ノ守護・国司ヲバ、將軍ヨリ給テ候間、手ノ裏ヲ返ス様ナル綸旨ヲバ、何カハ仕候ベキト嘲弄シテコソ返サレケレ」と赤松円心からは嘲弄を受ける（巻一六）。正成は「此年ノ春ハ尊氏ノ逆徒ヲ九州ヘ退ラレ候シ事、聖運トハ申ナガラ、偏ニ御計略ノ武徳ニ依シ事ニテ候ヘバ、合戦ノ方ニ於テハ誰カ偏シ申候ベキ」と述べているが（「偏」は『太平記』用語というべきであろう）、義貞は武徳の人にすぎない。「今日ヲ限ノ運命也」と思い定めても生き延びてしまふ（巻一七）。北国における凍死の危機、飢餓の危機も陰鬱な義貞にふさわしい（「薄衣ナル人、飼事無リシ馬共、此ヤ彼ニ凍死デ、行人道ヲ不去敢」、「秘蔵ノ名馬共ヲ、毎日二疋ヅツ差殺シテ、各旨ヲ朝夕ノ食ニハ当タリケル」。斯波道朝の黒丸城を落とすことに拘った義貞は「詮ナキ小事ニ目ヲ懸テ大儀ヲ次ニ成レケル」と批判されている。義貞の見た大蛇の夢は凶兆と解釈され、次のような死を迎える。

此馬名譽ノ駿足ナリケレバ、一二丈ノ堀ヲモ前々軋ク越ケルガ、五筋マデ射立ラレタル矢ニヤヨハリケン。小溝一ヲコヘカネテ、屏風ヲタラスガ如ク、岸ノ下ニゾコロビケル。義貞弓手ノ足ヲシカレテ、起アガラントシ給フ処ニ、白羽ノ矢一筋真向ノハツレ、眉間ノ真中ニゾ立タリケル。急所ノ痛手ナレバ、一矢ニ目クレ心迷ヒケレバ、義貞今ハ叶ハジトヤ思ケン、抜タル太刀ヲ左ノ手ニ取渡シ、自ラ頸ヲカキ切テ、深泥ノ中ニ蔵シテ、其上ニ横テゾ伏給ヒケル。（巻二〇）

馬も弱々しいが、義貞の存在はまさに泥中に隠れるものでしかない（大蛇が示す通り水の挿話である）。「会者定離ノ理ニ、愛別離苦ノ夢ヲ覺シテ」とあるように、匂当内侍との悲恋も義貞が時代遅れのキヤラクターであることを印

象づける。それに対して、卷一七で「主上モ義貞モ出拔テ」騙したりする佐々木道誉の存在は華々しいものである。

此比殊ニ時ヲ得テ、榮耀人ノ目ヲ驚シケル佐々木佐渡判官入道道誉ガ一族若党共、例ノバサラニ風流ヲ尽シテ、西郊東山ノ小鷹狩シテ帰リケルガ、妙法院ノ御前ヲ打過ルトテ、跡ニサガリタル下部共ニ、南底ノ紅葉ノ枝ヲ折セケル。(中略) 悪ヒ奴原ガ狼藉哉トテ、持タル紅葉ノ枝ヲ奪取、散々ニ打擲シテ門ヨリ外ヘ追出ス。道誉聞之、何ナル門主ニテモヲワセヨ、此比道誉ガ内ノ者ニ向テ、左様ノ事翔ン者ハ覺ヌ物ヲト忿テ、自ラ三百余騎ノ勢ヲ率シ、妙法院ノ御所ヘ押寄テ、則火ヲゾ懸タリケル。折節風烈ク吹テ、余煙十方ニ覆ケレバ、建仁寺ノ輪藏・開山堂・并塔頭・瑞光庵同時ニ皆焼上ル。

(卷二二)

「例ノバサラニ風流ヲ尽シテ」とあるが、建物を炎上させる道誉は、それによつて赤い紅葉を強引に現出させているのである(卷三九では香木を一気に焚き上げる)。だが、『平家物語』卷六の「紅葉」で強調されていたのは落ち葉を焚いた下役人を許す高倉天皇の「柔和」であつた。

佐々木一族若党は「結句御所トハ何ゾ、カタハライタノ言ヤ」と山門方を嘲弄しているが、道誉親子が連歌に熱中していたことを考え合わせると、「結句」の一語は強い響きをもつ。「結句」とともに事態はエスカレートするのであつて、乱闘は連歌の延長上にあるかのようだ(11)。

山門の衆徒は死罪を訴えるが、道誉は行為をさらに増長させる。「將軍モ左兵衛督モ、飽マデ道誉ヲ被鼻負ケル間、山門ハ理訴モ疲テ、款状徒ニ積リ、道誉ハ法禁ヲ輕ジテ奢侈弥恣ニス」。遠流に決まっても道誉は愚弄、嘲弄をやめない。「道々ニ酒肴ヲ設テ宿々ニ傾城ヲ弄ブ。事ノ体尋常ノ流人ニハ替リ、美々敷ゾ見ヘタリケル。是モ只公家ノ成敗ヲ輕忽シ、山門ノ鬱陶ヲ嘲弄シタル翔也」(卷二二)。これは権門体制への愚弄、嘲弄である。このあたり記事の配列に年次の乱れが指摘されるが、バサラとは時間感覚を狂わせるものにはがいない。

「古ヨリ山門ノ訴訟ヲ負タル人ハ、十年ヲ過サルニ皆其身ヲ滅ス」と言い習わされている。しかし、道誉自身が滅亡することはない。軍功を立てた山名師氏が恩賞を期待したときも、道誉は「今日ハ連歌ノ御会席ニテ候、只今ハ茶会ノ最中ニテ候トテ一度モ対面ニ不及」という(卷三二)。バサラとは何か。それは燃焼であり、享楽であり、寄合である。バサラを可能にしたのは都市の流通と商工業の発達であらう。

『平家物語』巻一で清盛の手先となつた禿髮は異様な風体でバサラの先駆といえなくもない。しかし、「をのづから平家の事あしざまに申者あれば、一人聞き出さぬほどこそありけれ」とあるように豪快さはなく、むしろ秘密警察めいた陰湿さを有している。『太平記』巻一二には「宴罷テ和興ニ時ハ、数百騎ヲ相隨ヘテ内野・北山辺ニ打出テ追出犬、小鷹狩ニ日ヲ暮シ給フ。其衣裳ハ豹・虎皮ヲ行滕ニ裁テ、金欄纈纈ヲ直垂ニ縫ヘリ」と千種忠顕の享楽ぶりが記されるが、後醍醐天皇隠岐配流の際、道誉が護送役として忠顕と接触があつたのは偶然ではない。

道誉は尊氏方に付いて東国へ従軍し、傷つて義貞に降参するが、すぐさま寝返る（巻一四「矢矧・鷲坂・手超原河原闘事」）。近江では東坂本の後醍醐天皇に降参するが、競争相手の小笠原氏を討伐して守護職を手に入れると、すぐさま寝返る（巻一七「江州軍事」）。それ以前の道誉は北条高時の信頼を受け、後醍醐天皇の寵姫廉子の信頼を受けていたようである。こんなふうに出場を次々に入れ替えるところは『平家物語』の大夫房覚明に似ていなくもない。覚明が書記の能力で生き延びたとすれば、道誉は圧倒的な蕩尽のパワーで生き延びたのである。巻三七に留守宅をとさら美麗にし楠正儀の太刀と鎧を手に入れる挿話があるが、道誉はそんな「博奕」によって自邸を炎上から守つたことになる（例ノ古博奕ニ出シヌカレテ、幾程ナクテ、楠、太刀と鎧ヲ取ラレタリト笑フ族モ多カリケリ）。

巻三三の一節をみると、その博打はほとんど蕩尽というべきものである。「都ニハ佐々木佐渡判官入道道誉ヲ始トシテ在京ノ大名、衆ヲ結テ茶ノ会ヲ始メ、日々寄合活計ヲ尽ス（中略）此茶事過テ後又博奕ヲシテ遊ビケルニ、一立テニ五貫十貫立ケレバ、一夜ノ勝負ニ五六千貫負ル人ノミ有テ百貫トモ勝ツ人ハナシ。此モ田楽・猿楽・傾城・白拍子ニ賦リ捨ケル故也」（巻三三）。毒殺された直義に従二位が贈られ、將軍尊氏が亡くなるのは、この直後であり、あたかも博打と連動しているかのようだ。巻三四には畠山道誓のバサラぶりがみられ、道誉と連携することになる。

巻三五で道誓や道誉たちは「酒宴・茶ノ会」を催すが、それは仁木義長を追い落とすためである。「道誉只今仁木ニ対面シテ、軍評定仕候ハンズル其間ニ、可然近習ノ者一人被召具、女房ノ体ニ出立セ給テ、北ノ門ヨリ御出候へ」と語つて、道誉は將軍義詮を逃がす。評定の最中、義長を出し抜く企てが進行していたのである。

巻三六で道誉は鬪茶を催すが、それは細川清氏を追い落とすためである。「七所ノ飾ハ珍キ遊ナルベシトテ、兼日ノ約束ヲ引違、道誉ガ方ヘヲハシケレバ、相模守ガ用意徒ニ成テ、教寄ノ人モ空ク帰ニケリ」。巻三九では「大原野

花会」を開くが、それは斯波道朝を追い落とすためである。「道誉兼テハ可參由領状シタリケルガ、態ト引違ヘテ、京中ノ道々ノ物ノ上手共、独モ不残皆引具シテ、大原野ノ花ノ本ニ宴ヲ設ケ席ヲ妝テ、世ニ無類遊ヲゾシタリケル。道朝の花見に出席すると返事しながら、より盛大な花見を自ら催している。戸外におけるバサラの開放性に注目しておきたい。「一丈余リノ鑰石ノ花瓶ヲ鑄懸ケテ、一双ノ華ニ作り成シ。」。「婆娑羅」は金剛に由来するともいわれるが、金属との相性の良さがうかがえる。

では、同じくバサラにみえる佐々木道誉と高師直の相違は何か。それは芸事に熱中するバサラと女色に熱中するバサラの相違であろう。それほど師直の好色ぶりが強烈だからである。

其比師直チト違例ノ事有テ、且ク出仕ヲモセテ居タリケル間、重恩ノ家人共是ヲ慰メン為ニ、毎日酒肴ヲ調テ、道々ノ能者共ヲ召集テ、其芸能ヲ尽サセテ、座中ノ興ヲゾ促シケル。或時月深夜閑テ、萩葉ヲ渡風身ニ入タル心地シケル時節、真都ト覚都檢校ト、二人ツレ平家ヲ歌ケル：

(卷二一)

芸能は病気を治すものとして位置づけられている。源頼政が鶴を退治して美女を手に入れた話を聞いた師直は、いわば芸能にのせられて美女を所望する。

兼好ト言ケル能書ノ遁世者ヲ呼寄テ、紅葉重ノ薄様ノ、取手モクユル計ニコガレタルニ、言ヲ尽シテゾ聞ヘケル。返事遅シト待処ニ、使婦リ来テ、御文ヲバ手ニ取ナガラ、アケテダニ見給ハズ、庭ニ捨ラレタルヲ、人目ニカケジト懐ニ入婦リ参テ候ヌルト語りケレバ、師直大ニ氣ヲ損ジテ、イヤイヤ、物ノ用ニ立ヌ物ハ手書也ケリ、今日ヨリ其兼好法師、是ヘヨスベカラズトゾ忿ケル。

(卷二一)

塩治判官高貞の妻に恋慕するようになった師直は兼好に代筆を頼むが、失敗する。その激的な怒りは師直の存在を特徴づけている。師直は暴力、高貞妻はエロス、兼好は知をそれぞれ体現した存在であろう。知の無力を嘲笑うのが師直である。兼好の『徒然草』は暴力とエロスの間で自己への配慮を考えた省察ともいえる。代わって薬師寺公義が師直に迎合し、「兼好ガ不祥、公義ガ高運、栄枯一時ニ地ヲ易タリ」となる。師直は「金作りノ丸鞆ノ太刀」を公義に与えているが、金作りの太刀で手柄を立てた新田義貞の挿話を嘲笑するかのようだ(巻六で正成が未来記を見せてくれた天王寺の僧に与えたのも金作りの太刀であり、巻一七で尊氏が土岐頼直に与えたのも金作りの太刀であった)。

二間ナル所ニ、身ヲ側メテ、垣ノ隙ヨリ闖ヘバ、只今女房湯ヨリ上リケリト覺テ、紅梅ノ色コトナルニ、水ノ如ナル練貫ノ小袖ノ、シホシホトアルヲカイ取テ、又レ髪ノ行エナガクカカリタルヲ、袖ノ下ニタキスマメル虚ダキノ煙匂計ニ残テ、其人ハ何クニカ有ルラント、心タドタドシク成ヌレバ、巫女廟ノ花ハ夢ノ中ニ残り、昭君村ノ柳ハ雨ノ外ニ疎ナル心チシテ、師直物ノ怪ノ付タル様ニ、ワナワナト振ヒ居タリ。

(卷二二)

狭いところに身体を収縮させた師直は「ワナワナ」と震えており、この後、暴力を爆発させるであろうことを予感させる。「未胎内ニアル子、刃ノサキニ懸ラレナガラ、半ハ腹ヨリ出テ血ト灰トニ塗タリ」、これが高貞一族の末路である。

木村源三一人付順テ有ケルガ、馬ヨリ飛デヲリ、判官ガ頸ヲ取テ、鎧直垂ニ裹ミ、遙ノ深田ノ泥中ニ埋デ後、腹カキ切テ、腸繰出シ、判官ノ頸ノ切口ヲ陰シ、上ニ打重テ懐付テゾ死タリケル。

(卷二二)

師直の讒言によつて逃げ出した高貞は追撃され、ついに仕留められる。これが後醍醐天皇に龍馬を献上した人物の末路にほかならない。泥中への埋没は義貞と全く同じである。家来の俊敏な動きと対照的だが、生真面目な義貞や高貞はバサラが横行する『太平記』の中で埋没するほかないのである(高貞が失脚した後は道誉が出雲守護になつてゐる)。

卷二六で楠政行が討ち取つた師直の首は偽首であり、師直は吉野の皇居に火を放つて勝ち誇る。「師直思慮深キ大将ニテ、敵ノ忻テ引処ヲ推シテ、些モ馬ヲ動カサズ」という武将としての姿と「武蔵守師直今度南方ノ軍ニ打勝テ後、弥心奢リ、拳動思フ様ニ成テ、仁義ヲモ不顧、世ノ嘲弄ヲモ知ヌ事共多カリケリ」という好色ぶりが平然と両立しているのが『太平記』の魅力である。両者の関係は「夫富貴ニ驕リ功ニ侈テ、終ヲ不慎ハ、人ノ尋常皆アル事ナレバ」と容易く説明されている。

申モ無止事宮腹ナド、其数ヲ不知、此彼ニ隱置奉テ、毎夜通フ方多カリシカバ、執事ノ宮廻ニ、手向ヲ受ヌ神モナシト、京重部ナンドガ咲種ナリ。

(卷二六)

師直の好色は止むことがなく、享楽は神仏さえ招き寄せる。こうしたバサラの先駆者として『平家物語』巻八の木

曾義仲を挙げるのできるのではないだろうか。「たちの振舞の無骨さ、物いふ詞つづきのかたくななる事かざりなし」と都人から笑いの対象となった義仲だが、実は新しい歴史の享樂を体現していたのである（とはいえ、「日来はなにもおほえぬ鎧が今日は重くなつたるぞや」とあるように卷九の義仲は重く情動化されており、軽快なのは坂落、逆櫓、八艘飛びをする義経のほうである）。

妙吉によって伝えられた師直の発言は注目に値する。「都二王ト云人ノマシマシテ、若干ノ所領ヲフサゲ、内裏・院ノ御所ト云所ノ有テ、馬ヨリ下ル六借サヨ。若王ナクテ叶マジキ道理アラバ、以木造ルカ、以金鑄ルカシテ、生タル院、国王ヲ何方ヘモ皆流シ捨奉ラバヤ」（卷二二〇）。王など飾り物にすぎないという。実際、師直の弟は金属を溶かし再加工している。生きている院など犬と同じだと吐き捨てる頼遠の発言とも呼応する（「カラカラト打笑ヒ、何二院ト云フカ、犬ト云カ、犬ナラバ射テ落サント云」卷二二三）。

もちろん、道誉や師直のバサラ狼藉は教訓として役立たない。しかし、その強度が意味づけを拒んで圧倒しているのである。逃亡し殺されるとき師直は変装しており、「深泥」にまみれ「蓮葉」で顔を隠しても目立ってしまう（「執事兄弟モ、同遁世者ニ打扮テ、無常ノ岐ニ策ヲウツ」卷二一九）。師直兄弟に見切りをつけて出家するのは公義だが、「越後中太ガ義仲ヲ諫カネテ、自害ヲシタリシニハ、無下ニ劣リテゾ覚タル」と非難されている。『平家物語』とは時代が異なるのである。「取バウシ取ネバ人ノ数ナラズ捨ベキ物ハ弓矢也ケリ」という公義の歌が示すように、弓矢を取るのが武家に限定される時代ではない。

卷二四にはバサラ批判の言説がみえる。「武家ノ輩ヲ如此諸国ヲ押領スル事モ、軍用ヲ支ン為ナラバ、セメテハ無力折節ナレバ、心ヲヤル方モ有ベキニ、ソゾロナルバサラニ耽テ、身ニハ五色ヲ粧リ、食ニハ八珍ヲ尽シ、茶ノ会酒宴ニ若干ノ費ヲ入、傾城田楽ニ無量ノ財ヲ与ヘシカバ、国費へ人疲テ、飢饉疫癘、盜賊兵乱止時ナシ。是全ク天ノ災ヲ降スニ非ズ。只国ノ政無ニ依者也」。これは夢窓疎石が直義に天龍寺建立を勧める一節であり、直義自身の考えに近いのであろう。

ところで、兵藤裕巳『太平記（よみ）の可能性』（講談社学術文庫、二〇〇五年）は『太平記』を通して日本思想史の枠組みまで提示しており、はなはだ興味深い。しかし、同書はかえって国民国家の枠組みを強化しているよう

に思われる。むしろ、国民国家の枠組みに回収されない『太平記』の細部を輝かせるべきであらう。それゆえ本稿では「バサラ」の享楽に注目してみたいのである。バサラには非歴史的な輝きがある〔12〕。享楽とは何か十分に答えることはできないが、歴史の分節や解釈を拒むものでありながら、歴史の分節や解釈を押し進めてしまうものを取りあえず享楽と考えておきたい。『太平記』は天狗文学の集大成と評されるが（岡見正雄『室町文学の世界』岩波書店、一九九六年）、知的でかつ享楽にまみれた天狗が『太平記』では特権化されるのである。妙吉という天狗のように怪しげな弟子をもつ夢窓疎石は享楽と解釈を繋ぐ存在にはかならない。狼藉を働いた土岐頼遠の処分にかかわり（卷二三）、後醍醐供養のため天龍寺建立にかかわっているからである（卷二四）。

七 結句の連なり —— ゲームとしての国家

『菟玖波集』に道誉は八一句、息子の高秀は五句収められており、道誉親子の連歌愛好が知られる（森茂暁『佐々木導誉』吉川弘文館、一九九四年）。足利尊氏も六八句収められている。覚一本『平家物語』には一例も見出すことができないが、『太平記』に「結句」が頻出するのは連歌が流行していたからではないだろうか〔13〕。用例をみていきたい。「恐懼ノ中ニ月日ヲ送ラセ給ケル。結句竹原入道ガ子共サへ、父ガ命ヲ背テ、宮ヲ討奉ラントスル企在ト聞シカバ：」（卷五「大塔宮熊野落事」）、これは大塔宮が十津川を脱出し高野山に向かうところである。「天理モ未ダアリケルニヤ、余リニ君ヲ悩マシ奉リケル隠岐判官、三十余箇日ガ間ニ滅ビハテテ、結句頸ヲ軍門ノ幢ニ懸ケラレケルコソ不思議ナレ」（卷七「船上合戦事」西源院本による、流布本は用例なし）。後醍醐天皇を苦しめた隠岐判官が滅亡するところだが、「結句」が天理の実現とされている。

「搦手ハ芝居ノ長酒盛ニテサテ休ヌ。結句名越殿被討給ヌト聞ヘヌレバ、丹波路ヲ指シテ馬ヲ早メ給フハ：」（卷九「足利殿打越大江山事」）、これは六波羅の期待を裏切つて尊氏が戦うことなく丹波に向かうところである。「人皆周章シケル処ニ、結句五月十八日ノ卯刻ニ、村岡・藤沢・片瀬・腰越・十間坂・五十余箇所ニ火ヲ懸テ、敵三方ヨリ寄懸タリシカバ：」（卷一〇「鎌倉合戦事」）、これは新田軍が鎌倉を攻めるところである。

第二部の用例をみてみよう。「義貞若宮ノ拜殿ニ坐シテ、頸共実檢シ、御池ニテ太刀・長刀ヲ洗ヒ、結句神殿ヲ打破テ、重宝共ヲ披見シ給ニ……」(卷一四「新田足利確執奏状事」西源院本は用例なし)、このとき発見した旗が新田足利不和の原因になったという。「先年正成ガ籠リタリシ金剛山ノ城ヲ、日本国ノ勢共ガ責兼テ、結句天下ヲ覆サレシ事ハ、先代ノ後悔ニテ候ハズヤ」(卷一六「新田左中将被責赤松事」)、これは赤松円心の白旗城攻撃を諦めるよう脇屋義助が義貞を説得しているところである。「今度西国へ下サレテ、数箇所ノ城郭一モ不落得シテ、結句敵ノ大勢ナルヲ聞テ、一支モセズ京都マデ遠引シタランハ、余リニ無云甲斐存ル間、戦ノ勝負ヲバ見ズシテ、只一戦ニ義ヲ劬バヤト存ル計也」(卷一六「正成下向兵庫事」)、これは義貞が正成に語っているところである。義貞までが「結句」と口にしてしまうのだが、そのせいで正成は敗北へと至る。「六月五日ヨリ同二十日マデ、山門数日ノ合戦ニ討ルル者疵ヲ被ル者、何千万ト云数不知、結句寄手東西ノ坂ヨリ被追立……」(卷一七「京都両度軍事」)、これは官軍が京都に攻め入って敗北するところである。

第三部の用例をみてみよう。「桃井大二忿テ、重テ可戦由ヲ申ケレ共、自余ノ大将ニ異儀有テ、結句越前国へ引返ス」(卷三〇「直義追罰宣旨御使事」)、これは尊氏と対立した直義が越前に退くところである。「畠山禪門ニ属シテ候ツルガ……一所懸命ノ地ヲ没収セラル。結句可討ナンドノ沙汰ニ及ビ候シ間、則武藏ノ御陣ヲ逃出テ……」(卷三三「新田左兵衛佐義興自害事」)。これは畠山道誓の命令で竹沢右京亮が偽って義興に降参するところであり、矢口の渡りで襲いかかり義興は自害に至る。

「仁木義長モ、三千余騎ト聞ヘシ皆落失テ五百余騎ニゾ成ニケル。結句憑タル連枝仁木三郎ハ、今度軍ニ打負テ、其儘降参シテ出タリケル」(卷三五「尾張小河東池田事」)、これは仁木義長が敗北していくところであり、仁木は南朝方に加わる。「光範ハ……定テ抜群ノ恩賞ヲゾ給ランズラント思ケル処ニ、夫コソ無ラメ、結句二代ノ忠功ヲ被処無ニ、多年管領ノ守護職ヲ被改替ケレバ、含憤残恨……」(卷三六「秀詮兄弟討死事」)。これは道誓のせいで摂津守護を解任された赤松光範が怒っているところだが、この後、道誓の息子は討ち死にする。

「二人モ不上洛。結句伊勢ノ仁木右京大夫ハ、土岐ガ向城ヘヨセテ、打負テ城ヘ引籠ル」(卷三七「南方官軍落都事」西源院本は用例なし)、これは南朝方が都を落ちていくところである。「人ノ五体ノ内ニハ、眼ニスギタル物ナシ、是

程用ニモナキ眼ヲ乞取テ、結句地ニ抛ツル事ノ無念サヨ、ト一念瞋恚ノ心ヲ発シシヨリ、菩提ノ行ヲ退シカバ……」(卷三七「身子声聞」)。これは天竺の身子がバラモンの行為に怒り破戒に至るところだが、煩惱から逃れたいことの例示となつている。眼を差し出すという献身的な善意が破壊的な悪意に転じてしまうのである。「四五千騎モ馳加ラヌ事ハアラジト憑シニ、案ニ相違シテ余所ノ勢一騎モ不付、結句一方ノ大将ニモト憑シ狩野介モ降参シヌ」(卷三七「畠山入道誓謀反事」)、これは畠山道誓が敗北していくところであり、義興を騙し討ちにしたことを後悔している。

「右馬頭ハ讃岐国ニハ怵ジト見ヘケル程ニ、結句備前ノ飽浦薩摩權守信胤宮方ニ成テ、海上ニ押浮、小笠原美濃守、相摸守ニ同心シテ、渡海ノ路ヲ差塞ケル間、右馬頭ノ兵ハ日々ニ減ジテ落行キ、相摸守ノ勢ハ国々ニ聞ヘテ夥シ」(卷三八「細川相摸守討死事」西源院本は用例なし)。これは讃岐国に渡つた細川清氏が強大化するところだが、細川頼之に討たれることになる。

「駅路ニ駅屋ノ長モナク閑屋ニ閑守人ヲ替タリ。結句此賊徒数千艘ノ舟ヲソロヘテ、元朝・高麗ノ津々泊々ニ押寄テ、明州・福州ノ財宝ヲ奪取ル」(卷三九「高麗人來朝事」)。和寇が略奪を繰り返す様子だが、それが元寇の悪夢を呼び起こすことになる。「事大儀ナレバ、山門モ南都モ急ニハ不立、結句山門ニハ、東西両塔ニ様々ノ異儀有テ、三塔ノ事書、鳥使翅ヲ費許也」(卷四〇「南禪寺与三井寺確執事」)。新関で南禪寺の僧が三井寺の鬼を殺したというが、延暦寺も興福寺もその態度は定まらない。こうして事態は連歌のように推移するのである。もちろん詩句の流行も考えられるが、「結句」を連歌用語と考えると、『太平記』の一面がよく理解できるように思われる。それは次のごとくバサラ絵の世界でもあろう。卷二九の「其比、靈仏靈社ノ御手向、扇団扇ノバサラ絵ニモ、阿保・秋山ガ河原合戦トテ書セヌ人ハナシ」という一節によれば、『太平記』世界は「バサラ絵」として存在している。

八 夢窓疎石と妙吉——文覚との比較

『平家物語』における僧侶の文覚は強固な意志の持ち主であり、平家打倒を実現させてしまふほどである。荒行が文覚を特徴づけており、問答の余地はない(卷五)。それに対して、『太平記』の僧侶、夢窓疎石はもっぱら議論を調

停する人である。「近年天下ノ様ヲ見候ニ、人力ヲ以テ争カ天災ヲ可除候。何様是ハ吉野ノ先帝崩御ノ時、様々ノ悪相ヲ現ジ御座候ケルト、其神靈御憤深シテ、国土ニ災ヲ下シ、禍ヲ被成候ト存候：ト被申シカバ、將軍モ左兵衛督モ、此儀尤トゾ被甘心ケル」(卷二四)。疎石は尊氏、直義と対立した後醍醐天皇の菩提を弔うため天龍寺の建立を勧めている。

土岐頼遠の処分の際して直義に口入れするが、それは中途半端なものであった。「夢窓和尚ノ武家ニ出テ、サリトモト口入シ給シ事不叶シヲ、欺ク者ヤ仕タリケン、狂歌ヲ一首、天龍寺ノ脇壁ノ上ニゾ書タリケル。ノイシカリシトキハ夢窓ニクラハレテ周濟計ゾ皿ニ残レル」(卷三三)。自らの享樂しか考えていないと疎石は非難されているのである。事実、直義を弟子とした疎石は奢り高ぶったかにみえる。「近来左兵衛督直義朝臣、將軍二代テ天下ノ権ヲ取給シ後、専ラ禪ノ宗旨ニ傾テ夢窓国師ノ御弟子ト成リ、天龍寺ヲ建立シテ陸座粘香ノ招請無隙、供仏施僧ノ財産不驚目云事無リケリ。爰ニ夢窓国師ノ法眷ニ、妙吉侍者ト云ケル僧是ヲ見テ浦山敷事ニ思ヒケレバ、仁和寺ニ一志房トテ外法成就ノ人ノ有ケルニ、陀祇尼天ノ法ヲ習テ三七日行ヒケルニ、頓法立ニ成就シテ、心ニ願フ事ノ聊モ不叶云事ナシ」(卷二六)。疎石を羨んだ妙吉は外法を習得し、直義に近づく。

上杉重能、畠山直宗にも唆され、妙吉は師直兄弟の悪口を直義に吹き込んでいる。「言ヲ尽シ譬ヲ引テ様々ニ被申ケレバ、左兵衛督情事ノ由ヲ聞給テ、ゲニモト覚ル心著給ニケリ。是ゾ早仁和寺ノ六本杉ノ梢ニテ、所々ノ天狗共ガ又天下ヲ乱ラント様々ニ計リシ事ノ端ヨト覚ヘタル」とある通り、妙吉の存在は天狗に等しい。

田楽棧敷の倒壊が天狗の仕業とされるのは、この直後である(卷二七)。続く雲景未来記では「見物ノ者ト云ハ洛中ノ地下人、商売ノ輩共也。其ニ日本一州ヲ治メ給フ貴人達交リ雑居シ給ヘバ、正八幡大菩薩・春日大明神・山王権現ノ忿ヲ含マセ給フニ依テ、此地ヲ頂キ給フ堅牢地神驚給フ間、其勢ニ応ジテ皆崩タル也」と解釈される。下剋上が混乱を生み出していたのである。

原因が天狗と判明したせいであろう、妙吉も力を失う。「自今後ハ左兵衛督殿ニ政道綺ハセ奉ル事不可有、上杉・畠山ヲバ可被遠流ト被許ケレバ、師直喜悅ノ眉ヲ開キ、困ヲ解テ打帰ル。次ノ朝廳妙吉侍者ヲ召取ント人ヲ遣シケルニ、早先立テ逐電シケレバ行方モ不知。財産ハ方々へ運び取り、浮雲ノ富貴忽ニ夢ノゴトク成ニケリ」。直義が失脚

するやいなや、すぐさま逐電するところも天狗そっくりである。直義の政道は天狗のせいで歪められていたことになる。「皆人恐怖シテ、直義ノ政道ヲゾ感ジケル」(卷二三)とある通り、直義の正義も恐怖に基づくものでしかない。

後醍醐天皇の倒幕に功績があり、俊寛と同じく硫黄島に流された文親も奢侈に耽っていた。「コノ僧正ハカクノ如ク名利ノ絆ニホダサレケルモ、直事ニアラズ、イカサマ天魔・外道ノ其ノ心ニ依託シテフルマハセケルカト寛タリ」(卷二二)。「太平記」の僧侶はことごとく享楽にまみれた存在なのである。「温室ニ入テ、瘡ヲタデラレケルガ、心身快シテ纒ノ楽ニ姪著ス。是時天狗共力ヲ得テ、造作魔ノ心ヲゾ付タリケル」と記された覚鑿上人も同様である(卷一八)。

疎石との問答を記録した『夢中間答集』で直義は「仏法ヲ行ズル人、ヤヤモスレバ魔道ニ入ルト申スコトハ、イカナル故ゾヤ」と問うている(引用は講談社学術文庫による)。図らずも、その実相を語ることになった『太平記』は禪宗的な問答の時代の産物なのである[14]。『太平記』の享楽はことごとく『建武式目』が禁じるところだが、『建武式目』がまさに問答であることを強調しておきたい。「鎌倉如元可為柳宮歟、可為他所否事」、これについては結論が出ていないままである。

『平家物語』において儒学の介入は少ないが、『太平記』は異なる。直義に入れ知恵する儒者にも注目しておこう(卷三〇)。「木ヲ以テ人ヲ作テ、是ヲ天神ト名ケテ帝自是ト博奕ヲナス。神真ノ神ナラズ、人代ハテ賽ヲ打チ石ヲ仕フ博奕ナレバ、帝ナドカ勝給ハザラン。勝給ヘバ、天負タリトテ、木ニテ作レル神ノ形ヲ手足ヲ切り頭ヲ刎ネ、打擲蹂躪シテ獄門ニ是ヲ曝シケリ」、ここで儒者が語っている殷帝武乙の悪行は道誉のそれに相当する。「下ニ炭火ヲヤキ、鉄湯炉壇ノ如クニヲコシテ、罪人ノ背ニ石ヲ負セ、官人戈ヲ取テ罪人ヲ柱ノ上ニ責上セ、鉄ノ縄ヲ渡ル時、罪人氣力ニ疲テ炉壇ノ中ニ落入、灰燼ト成テ焦レ死ヌ」、ここで儒者が語っている紂王の悪行は師直のそれに相当する。つまりバサラ大名の悪行とは儒学的な視点から増幅されたものなのである。文王にたとえられた直義は、その自己満足ゆえに儒者の言説を取り入れている。

九 未来記と座談——解釈の装置

後醍醐天皇が京都帰還を決定する場面が必要とされていたのは僉議と占いであったが（巻一一）、『太平記』において座談は不可欠の解釈装置といえる。巻二五「官方怨霊会六本杉事」をみてみよう。禪僧が仁和寺の六本杉のもとで官方怨霊の会合を目撃したものである。怨霊たちは次のように語っている。

サテモ此世中ヲ如何シテ又騒動セサスベキト宣ヘバ、忠円僧正末座ヨリ進出テ、其コソ最安キ事ニテ候ヘ。先左兵衛督直義ハ他犯戒ヲ持テ候間、俗人ニ於テハ我程禁戒ヲ犯サヌ者ナシト思フ我慢心深ク候。是ヲ我等ガ依所ナル大塔宮、直義ガ内室ノ腹ニ、男子ト成テ生レサセ給ヒ候ベシ。又夢窓ノ法眷ニ妙吉侍者ト云僧アリ。道行共ニ不足シテ、我程学解ノ人ナシト思ヘリ。此慢心我等ガ何処ニテ候ヘバ、峯ノ僧正御房其心ニ入替リ給テ、政道ヲ輔佐シ邪法ヲ説破サセ給ベシ。

（巻二五）

それぞれ別人が誰かに乗り移るので、主体は交替し誰が誰かわからない。ほとんど無目的に騒動を起こしているだけであり、ここからはどのような教訓も引き出せそうにない。おそらく、怨霊それ自体では存在することができないだろう。怨霊が存在するためには形式が必要である。怨霊という内容よりも、座談という形式が『太平記』の知なのである。それは揺らぐことがない。バサラは酒宴、茶会に集まり、怨霊は座談に集まるのであって、『太平記』においてバサラと怨霊は相似形をなす。座談こそが享楽と解釈を繋いでいる。

巻二七冒頭に記されるのは天変地異とその解釈、田楽流行とその解釈である。続く「雲景未来記事」をみてみよう。羽黒山の山伏、雲景が見聞き問答した内容を未来記として奏上したものである〔15〕。殺害された大塔宮も参加していたという。

雲景、不思議ノ事ヲモ見聞者哉ト思テ天下ノ重事、未来ノ安否ヲ聞バヤト思テ、サテ將軍御兄弟執事ノ間ノ不和ハ、何レカ道理ニテ始終通り候ベキト問ヘバ、三條殿ト執事ノ不快ハ一兩月ヲ不可過、大ナル珍事ナルベシ。理非ノ事ハ是非ヲ難弁。（中略）時与事只一世ノ道理ニ非ズ。臣殺君子殺父、力ヲ以テ可争時到ル故ニ下剋上ノ一端ニアリ。高貴青花モ君主一人モ共ニ力ヲ不得、下輩下賤ノ士四海ヲ吞ム、依之天下武家ト成也。是必誰為ニモ非ズ、時代

機根相萌テ因果業報ノ時到ル故也。

(卷二七)

是非か決定しがたいことが強調されている。だから問答は繰り返されるほかないのである。問題になっていたのは將軍尊氏・直義兄弟と執事師直・師泰兄弟との不和である。

雲景重テ申ケルハ、サテハ早乱悪ノ世ニテ下上ニ逆ヒ、師直・師泰我儘ニシスマシテ天下ヲ持ツベキ歟ト問ヘバ、イヤサハ不可有、如何末世濁乱ノ義ニテ、下先勝テ上ヲ可犯。サレ共又上ヲ犯咎難遁ケレバ、下又其咎ニ可伏。(中略)地口天心ヲ吞ト云変アレバ、何ニモ下刻上ノ謂ニテ師直先可勝。自是天下大ニ乱テ父子兄弟怨讎ヲ結び、政道聊モ有マジケレバ、世上モ無左右難静トゾ申ケル。

(卷二七)

上下安定することのない状態が繰り返されるという。尊氏は自邸を取り囲んだ師直を討ち取ろうとして、直義に「結句返テ狼藉ヲ企ル事、当家ノ瑕瑾武略ノ衰微是ニ過タル事ヤ候ベキ。併此禍ハ直義ヲ恨タル処也」と説得され中止する。使用されているのは「結句」という連歌用語だが、未来記を読み解くかのように直義は振る舞うのである。『平家物語』巻八では「平家はおちぬれど、源氏はいまだ入りかはらず。既に此京はぬしなき里にぞなりにける。開闢よりこのかた、かかる事あるべしともおぼえず。聖徳太子の未来記にも、今日の事こそゆかしけれ」として未来記への言及がなされていた。だが、主のいない都が情動化されるばかりであって、未来記を解釈しようという知的な意志は読みとれない。『平家物語』において未来記は必要ない。なぜなら、平家の滅亡は既成の事実だからである。

尊氏が九州にいる直義討伐に向かうのも師直の意見に従ってである(卷二八)。直義の突然死は「自滅」とみなされている(卷二九)。「大塔宮ヲ奉殺、將軍宮ヲ毒害シ給事、此人ノ御態ナレバ、其御憤深シテ、如此亡給フ歟。災患本無種、悪事ヲ以テ種トストイヘリ」。このように直義は尊氏よりも『太平記』にふさわしい解釈の対象である(16)。いつも受動的な尊氏に対して直義はいつも能動的だが、その正義ゆえに自滅する。

卷三五「北野通夜物語事」をみてみよう。北野神社の通夜で日野僧正頼位が三人の座談を聞く場面だが、それぞれが『太平記』の三つの視点を示している。すなわち関東出身であった武家の視点、南朝に仕えた貧しい儒者の視点、寺院に帰属していた法師の視点である。『太平記』を構成する三つの世界を示しているといつてよい。それは関東の世界、南朝の世界、寺院の世界である。

坂東声ナル遁世者、数返高ラカニ繰鳴シ、無所憚申ケルハ、世ノ治ラヌコソ道理ニテ候へ（中略）仏神領ニ天役課役ヲ懸テ、神慮冥慮ニ背カン事ヲ不痛、又寺道場ニ懸要脚僧物施料ヲ貪事ヲ業トス。是併上方御存知ナシトイへ共、セメ一人ニ帰スル謂モアルカ。角テハ抑世ノ治ルト云事ノ候ベキカ。
（卷三五）

武家出身の男は幕府失政の原因を税の取り立てに求め、宮方の政治に期待している（課税せざるをえなくなつたのは元寇のせいである〔17〕）。「夫政道ノ為ニ怨ナル者ハ、無礼・不忠・邪欲・功誇・大酒・遊宴・拔折羅・傾城・双六・博奕・剛縁・内奏、サテハ不直ノ奉行也」とバサラを批判し、「只一ノ直ナル猿ガ、九ノ鼻欠猿ニ笑レテ逃去ケルニ不異」と述べる。「只一ノ直ナル猿」が直義なのかもしれない。

鬢帽子シタル雲客打ホホ笑テ、何ヲカ心ニクク思召候覽。宮方ノ政道モ、只是ト重二、重一ニテ候者ヲ。某モ今年ノ春マデ南方ニ何候シテ候シガ天下ヲ覆ヘサン事モ守文ノ道モ叶マジキ程ヲ至極見透シテ、サラバ道広ク成テ、遁世ヲモ仕ラバヤト存ジテ、京ヘ罷出テ候際、宮方ノ心ニクキ所ハ露計モ候ス。
（卷三五）

貧しい儒者は宮方の政治にも期待できないと述べるが、そこに「重二、重一」と双六用語が出てくることに注目しておきたい。政治が双六と同じゲームであるかのような。「打ホホ笑テ」語る儒者は結論の虚しさを予期しているのであろう。

是ハ内典ノ学匠ニテゾアル覽ト見ヘツル法師、熟々ト聞テ帽子ヲ押除菩提子ノ念珠爪繰テ申ケルハ、倩天下ノ乱ヲ案ズルニ、公家ノ御答共武家ノ僻事トモ難申。只因果ノ所感トコソ存候へ。其故ハ、仏ニ無妄語ト申セバ、仰テ誰カ信ヲ取ラデ候ベキ。
（卷三五）

經典を学んだ法師は天下が乱れる理由を述べる。朝廷の過ちでも幕府の誤りでもなく、因果のせいだというのが、因果の根柢は信じるしかないものらしい。ここでは語れば語るほど言葉が説得力を失っていく。誰一人、正しい言葉を語ることができない、それが『太平記』の世界である。人語を語つて魚を裏切る「多舌魚」はその象徴ではないか。

加様ノ仏説ヲ以テ思フニモ、臣君ヲ無シ、子父ヲ殺スモ、今生一世ノ悪ニ非ズ、武士ハ衣食ニ飽滿テ、公家ハ餓死ニ及事モ、皆過去因果ニテコソ候ラメ、ト典籍ノ所説明ニ語りケレバ、三人共ニカラカト笑ケルガ、漏箭類ニ遷、晨朝ニモ成ケレバ、夜モ己ニ朱ノ瑞籬ヲ立出テ、己ガ様々ニ帰ケリ。以是安ズルニ、懸ル乱ノ世間モ、又

静ナル事モヤト、憑ヲ残ス許ニテ、頼意ハ帰給ニケリ。

(卷三五)

「カラカラ」笑いは意味や解釈を突き放す笑いであり、結論がない結論の確認であろう。人々はそれぞれ自分の方向に帰っていくしかないのである。笑いは因果論を肯定したり否定したりするものではなく、そうした解釈を突き抜けるものである〔18〕。

後醍醐天皇を供養する天龍寺の造営を議論した卷二四「依山門噉訴公卿僉議事」を振り返ってみたい。天台宗と禪宗の対立は決着が付かず、仏性をめぐって宗論をしても「此三儀、是非区二分レ、得失互ニ備レリ」というのが結論である。「縦宗論ヲ到ス共、天台ハ唯受一人口決、禪家ハ没滋味ノ手段、弁理談玄トモ、誰カ弁之誰カ会之」と述べている。

卷三六では仁木義長について「彼ガ三生ノ前ニ義長法師ト云シ時、五部ノ大乘経ヲ書テ此国ニ納メタリキ(中略)今身ハ武名ノ家ニ生レテ、諸国ノ管領シ、眷属多クタナヒクトイヘ共、悪行心ニ染テ、乱ヲ好ミ人ヲ惱ス。哀ナル哉、過去ノ善根此世ニ答テ、今生ノ悪業又未来ニ酬ハン事ヲ」と記す。善と悪は入り交じっているのである。卷三九では大内弘世について「在京ノ間数万貫ノ錢貨・新渡ノ唐物等、美ヲ尽シテ、奉行・頭人・評定衆・傾城・田楽・猿楽・遁世者マデ是ヲ引与ヘケル間、此人ニ増ル御用人有マジト、未見ヘタル事モナキ先ニ、誉ヌ人コソ無リケレ。世上ノ毀誉非善悪、人間ノ用捨ハ在貧富九トハ、今ノ時ヲヤ申スベキ」と記す。善悪とは別の基準が提示されている。

『太平記』は『平家物語』と違って、終わりからの超越的な視点が無い。仏教史観が最後に救済を用意するのに対して、儒学史観は複数の力の安定しか用意できないのである。

おわりに —— 平家物語と太平記

以上、『平家物語』と比較しつつ『太平記』の特徴的な局面とキャラクターをみてきた。式目のない連歌のように飛躍した論述になってしまったが、それぞれ特徴的なキャラクターを一人ずつ挙げておきたい。それは平知盛と佐々木道誉である。運命論を体现する人物と歴史の享楽を体现する人物であり、戦士の二つの側面といえるかもしれない。

未来記や座談が示すように、『太平記』は歴史を解釈し続ける装置である。また、『ローマ皇帝伝』ほどではないが歴史の享楽を明らかにしたところに『太平記』の魅力がある。解釈を拒む享楽といつてもよい。道誉や師直の享楽はどのような教訓も語りはしないからである。それに対して、『平家物語』は歴史を情動化し続ける装置である。知盛の言葉が示すように、歴史を共同体の運命と同一化している。『平家物語』が運命共同体の文学だとすれば、『太平記』は共同体を解体する下剋上の文学である。『太平記』のほうは共同体の一体性を作り出さない、むしろ様々な解釈の混乱を呼び寄せてしまう。そこに『太平記評判秘伝理尽鈔』の世界が開かれるのである。『太平記』は近世演劇の知的な枠組みとなり、演劇作者が様々な情動を盛り込むことになる〔19〕。

終わりのない未来記、終わりのない座談、終わりのない解釈、それが『太平記』の知の形態にほかならない。鎌倉幕府が滅亡しても後醍醐天皇が亡くなっても足利尊氏が亡くなっても『太平記』は続く。だが、『平家物語』では最期の光景ばかりが繰り返される。

『難太平記』の一節はよく引かれるところである。「昔、等持寺にて法勝寺の恵珍上人、此記を先三十余卷持参し給ひて、錦小路殿の御目にかけれしを、玄恵法印によませられしに、おほく悪ことも誤も有しかば、仰に言、是は且見及ぶ中にも以の外ちがひめ多し。追て書人又切出すべき事等有。其程、不可有外聞之由仰有し。後に中絶也。近代重て書続げり」(群書類従)。これによれば、『太平記』は生誕のときから解釈を促し続けている。

錦小路殿すなわち直義は建武式目を制定した人物であり、そこには「近日号婆娑羅、専好過差、綾羅錦繡、精好銀劍、風流服飾、無不驚目、頗可謂物狂歎」とバサラ批判の条文がみられる(岩波思想大系)。「太平記」に安定をもたらす管領細川頼之は式目の側の人物であり(諸事ノ沙汰ノ途轍、少シ先代貞永・貞応ノ旧規ニ相似タリ)、『太平記』の成立にかかわっているとみられる。それに対して、天正本『太平記』の成立には佐々木氏が関与しているとされる。つまり、『太平記』諸本の成立においても規律とバサラの議論が続いていることになる。

宝井其角の「平家物語也太平記は月も見ず」という句はよく知られる(『五元集』)。「平家物語」は情動的な月(運命)を見ているのであろう。しかし『太平記』は見ることなく、解釈し続けるのである。

卷二一の冒頭は「天下時勢粧事」と題されている。「納言宰相ナンド路次ニ行合タルヲ見テモ、声ヲ学ビ指ヲ差テ

軽慢シケル間、公家ノ人々、イツシカ云モ習ハヌ坂東声ヲツカイ、著モナレヌ折烏帽子ニ額ヲ顕シテ、武家ノ人二紛ントシケレ共、立振舞ヘル体サスガニナマメイテ、額付ノ跡以外ニサガリタレバ、公家ニモ不付、武家ニモ不似、只都鄙ニ歩ヲ失シ人ノ如シ」。武家は公家を模倣し公家は武家を模倣し、それぞれ正体不明のものとなって彷徨う。感情移入はできず、だからこそ解釈が必要とされるのであろう。『太平記』が「時勢粧」の記録であるとしても、そこには読み継がれるべき仕掛けが施されている。

注

- 〔1〕拙稿「平家物語と日付の問題」(沖繩国際大学日本語日本文学研究)四、一九九九年では「平家物語の日付が叙事詩的枠組みとなって、情動を生み出していることを論じた。しかし、『太平記』における日付は知的な解釈と操作の対象となっているようである。日付表現に着目した論考として石田洵「太平記考」(双文社、二〇〇七年)がある。
- 〔2〕本稿は永種安明「太平記」(岩波書店、一九八四年)に多くを学んでいるが、あるべき構想を想定し、その破綻を強調する同書はいささか三部構成説に囚われすぎているように思われる。大津雄一「軍記の転換点としての太平記」(『太平記を読む』前掲)もまた物語の機能不全をしきりに強調している。しかし、『太平記』における知の形式は厳然として存在し続けるのではないか。その意味では議論を重視する大津「太平記」と「知」(中世の軍記物語と歴史叙述)竹林舎、二〇一一年)のほうが示唆的である。「応仁記」などには「太平記」的な知の形式が欠けている。
- 〔3〕「備」の用例は「武家ヲバ備シケリ」(巻五「大塔宮熊野落事」)、「韓信ガ兵書ヲ備シテ背水ノ陣ヲ張シニ遣ヘリ」(巻三三「山名右衛門佐為敵事」)など。天正本の北野通夜物語にも見て取ることができる(「臣君ヲ備シ」)。
- 〔4〕大正記には「敵ヲ為謀手負タル真似ヲシテ」(巻一〇「長崎父子武勇事」)、「源氏ノ兵ノ手負テ本国へ帰ル真似ヲシテ」(同「左近大夫偽洛奥州事」)、「誠シ顔ニ成テ云ケレバ」(巻二一「五大院上衛門宗繁藤相探太郎事」)、「誠ニ貳ナケニ申ケレバ」(巻二七「上杉昌山流罪死刑事」)など偽装の挿話が頻出する。直義による偽の論旨も興味深い(巻一四)、最大の偽装は三種の神器のそれである(巻三〇「持明院殿吉野遷幸事」)。
- 〔5〕「平家物語」における熊野は信仰の対象であり信仰の場であった(巻一〇「維盛入水」)。それに対して、『太平記』における熊野は解釈の対象であり解釈の場である。「熊野三山ノ間ハ尚モ人ノ心不和ニシテ大儀成難シ」(巻五)。

〔6〕源義経と楠正成はともに知謀の人といえる。義経は頼朝との血縁ゆえに排除されていくが、正成は無縁ゆえに神出鬼没である。「義経記」と「曾我物語」がどのように「平

家物語」を補充しているか考えてみたい。一方は貴種の抗争であり、他方は在地の抗争だが、義経と曾我兄弟は頼朝に敗北することで、ともに頼朝政権の確立に貢献している。

〔7〕「兄弟同枕ニ倒重テ死ニケリ」が合戦の始まりとなり、「太刀ヲ背」に負った連中の活躍で笠置城が陥落したことを想起すべきかもしれない(巻二)。巻二六の挿話もまた背負う物語になっている。下和は「石ヲ背ニ負セテ」追放されるが、藤原將軍が「杖ヲ背ニ負テ、相如ガ許ニ行」き謝罪する点で呼応しているからである。

〔8〕大坪亮介「太平記」北野通夜物語の構想(『文学史研究』四八二〇〇八年)はカラカラ笑いを相手に対する精神的優位とみなしているが、本稿の視点は異なる。同論文が指摘する延慶本『平家物語』の用例「尼公からからと咲て申けるは：」(文学が道念之由緒事」第二末)にしても、カラカラ笑いが絶望的な死を招き寄せてしまうからである。決まって破滅が訪れるというのがカラカラ笑いの特質にはかならない。なお、流布本『太平記』にみられない用例を掲げておく。「人見本間ヲ見テ、夜部宣ヒシ事ヲ突トバシ思ヒタラバ、孫程ナル人ニ出シ抜カレマジトカラカラト打笑ヒテ、頼リニ馬ヲハヤメタリ」(西源院本巻六「赤坂合戦事」)。昨夜の言葉通りに先駆け、孫のような世代とともに死地に赴くところに鼓舞するものがあるだろう。そして骸となる。それを証言するのは「付従テ最後ノ十念勸メツル聖」である。

〔9〕「エツポ」に入った笑いは「太平記」に三度みられるが、その先例は『平家物語』である。「御前に候ける瓶子を、狩衣の袖にかけて、引倒されたりけるを、法皇、あれはいかにと仰ければ、大納言立婦で、平氏倒れ候ぬとぞ申されける。法皇まつほにいらせおはしまして：」(巻一)。自ら死を招きかねないとき起る笑いが「エツポ」の笑いである(源平盛衰記」巻五には「笑壺の会にて侍りき」とみえる)。この『平家物語』冒頭の笑いは末尾における知盛の「からから」笑いに対応している。さらに古態本『平治物語』中巻における信賴最期の挿話とも呼応する。「一日の猿楽に鼻かくといふ世俗の狂言こそあれ、此信賴は、一日のいくさに、鼻かきてけりと宣ひければ、皆人、一同に唾とぞわらはれけり。御所にも聞し召されて、何事を笑とぞ御尋あり。左少弁成頼、事のよしを奏聞すれば、主上もまつほにいらせ給ひけり」(新古典大系)。信賴の惨めな死は猿楽的な笑いによつて吹き飛んでしまうのである(ただし金刀比羅本、流布本にはみえない)。

〔10〕西源院本巻三「飢人投身事」には「兵部少輔女房ヲ背ニカキ負ヒ、二人ノ子ヲ前ニ抱ヒテ、又本ノ淵ニ飛入り、共ニ空ク成ニケリ」とあるが、背中の腫れ物で亡くなる尊氏の挿話と呼応しているようにみえる。鬼女を背負っていた大森彦七の挿話とも響かせてみたい(巻二二三)。いうまでもなく、尊氏の挿話は背中の腫れ物で亡くなった方將軍の挿話と響き合う(巻三九)。それは「功高シテ命ハ短シ、何ヲカ捨何ヲカ取シ」という選択の問題に繋がっている。

〔11〕田楽と戦闘の関連性については松岡心平「宴の身体」(岩波書店、一九九一年)を参照。「聚散離合ノ有様ハ須臾ニ反化シテ前ニ有歟トスレバ忽焉トシテ後ヘニアリ、御方カト思ヘバ屹トシテ敵也、十方二分身シテ：」(巻一〇「長崎高重最期合戦事」)。「太平記」のテクストそのものが、こうしたパフォーマンスを模倣しているのではないだろうか。「平家物語」にはみられないパフォーマンスだからである。高重はパサラ的かつケリラ的だが、「前ニ在歟トセバ、後ヘヌケ、左ニ在カトセバ右ヘ廻テ、七縦八横ニ乱テ敵ニ見スル」という義貞の戦法は高重との戦いに学んだものかもしれない(巻一五「建武二年正月十六日合戦事」)。

(12) 佐々木道誓を「日本のパロックの原像」とみなす山口昌男「歴史・祝祭・神話」(中央公論社、一九七四年)は依然として示唆に富む。しかし、すべてが秩序の安定化に回収されかねないので、ここでは享楽の破滅的な側面を強調しておきたい。享楽が意味や解釈とすれ違つて描き出すのが本稿の課題である。

(13) 「太平記」の影響だろうか、「明德記」(群書類従)には「結句」が頻出する。「此事ヲ明日日治ニテ直ニ仰合セラルベキニテ候ナル。結句御免ノ事モハヤ既ニ落居カト申沙汰シ候」一面々一人シテ彼等ガ一家ニ対揚スベキ人々ナルニ、結句山名ノ一族同シテ責上ラバ……」左様ノ悪党共ヲコソ御シツメナカラメ、結句御謀反ヲ思召シ立セ給ヘ候事、以外ノ悪逆也」など。それに対して、「保元物語」の用例「無双の大忠なりしかども、異なる勳賞も無く、結句いく程もなくして身を亡はしけるこそあさましけれ」(中)は古活字本のもので、半井本、金比羅本にはみえない。「曾我物語」の用例「相伝の所領を横領せらるるだにも安からざるに、けつ、女房まで取り返されて」(一)、五郎は、ゆるさるる事はかなはず、けつ、後の世までと、ふかく勘当せられて」(七)も古活字本のもので、真名本、大石寺本にはみえない。したがって「結句」は古活字本の段階で使用された可能性が高い。また、「宝物集」の用例「酒にゑひて本心をうしなふゆゑに、人のめをかし、けつ、庭鳥をぬすみてころしてける」(下)も古活字三卷本のもので、七巻本にはみえない。なお、「拾玉集」五一〇七の詞書には「今は歌と申ことは思絶えたれど、結句をばこれにてこそつかうまつるべかりけれ」という西行の言葉が出てくる。

(14) 天狗について記す「比良山古人靈託」(延応元年)が問答体であることに注目しておきたい。あたかも問答自体が天狗なるものを生み出すかのようだ。

(15) 未来記については小峯和明「中世日本の予言書」(岩波新書、二〇〇七年)を参照。なお、「歌には未来記として嫌ひ侍る体あり」と連歌書はいう(「ささめ」こと)。技巧や解釈の入り組んだものが未来記であろう。未来記は解釈と二体なのだが、和歌や連歌では嫌われている。「未来記の中に二種侍るべし。一には心の未来記、二には詞の未来記なるべし。詞の未来記とは、大略秀句の悪しきなり」(吾妻問答)。

(16) 足利直義については森茂暁「太平記と足利政権」(中世日本の政治と文化)思文閣出版、二〇〇六年)を参照。直義はバサラを批判することで、かえって際立たせる。また、直義は否定的な解釈を受けることで、かえって「太平記」にふさわしい人物になる。「太平記」の批判精神のみを評価する論者は、あたかも直義に似てくるかのようだ。

(17) 「太平記」には和寇による侵略も描かれる。巻三九には「其徳天ニ叶ヒ其化速ニ及シ上古ノグニモ、異国ヲ被順事ハ、天神地祇ノ力ヲ以テコソ、容易征伐セラレシニ、今無業不造ノ賊徒等、元朝高麗ヲ奪犯、驛使ヲ立サセ、其諜ヲ送ラシムル事、前代未聞ノ不思議ナリ。角テハ中々吾朝却テ異国ニ奪ルル事モヤ有ランズラント、怪シキ程ノ事共也」とある。「太平記」には元寇という傷が刻み込まれている(禪僧の存在も外の世界と無縁ではない)。それに対して、「平家物語」は内向きであり閉じられた世界の物語である。清盛が対外貿易に熱心であったことは強調されていない。

(18) この「カラカラ」笑いについて大坪亮介の前掲論文は因果論の相対化とみなし、樋口大祐「転形期とヒューモア」(「乱世」のエクリチュール)森話社、二〇〇九年)は自己の相対化とみなしているが、本稿の視点は異なる。それは冷静なヒューモアではなく破滅的な享楽である。知盛の「からから」笑いは「太平記」的な享楽の萌芽であつ

たといえる。

〔19〕『大経師喜暦』で太平記読みの姿を描いた近松は題材として『太平記』を存分に活用している。拙稿「近松の時代物」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』三三、二〇一三年)を参照。さらにいえば、『太平記』は『水滸伝』とともに譚本の世界を作り上げていく。『太平記』と『水滸伝』には「カラカラ」笑いの共通点がみられる(「背癢」を患う宋江に相当するのは尊氏であろう)。岡島冠山による白話訳である『太平記演義』(享保四年)は『太平記』と『水滸伝』の同質性を示唆している。余談だが、谷崎潤一郎『吉野葛』(一九三二年)は『太平記』同様に解釈を促す作品である。また古井由吉『山蹠賦』(集英社、一九八二年、後藤明生「首塚の上のアドバールン」)講談社、一九八九年、金井美恵子『恋愛太平記』(集英社、一九九五年)など、視点の複数性と解釈の増殖性において『太平記』文学を忠実に継承しているかのようだ。

付記、本稿は沖縄国際大学特別研究費(二〇一一―二〇一三年度)によるものです。

キーワード、太平記、平家物語、享楽と解釈、運命と情動

要旨、本稿は『平家物語』と『太平記』を比較し、それぞれの知の形態を明らかにしようとした。未来記や座談が示す通り、『太平記』は歴史を解釈し続ける装置である。また、『ローマ皇帝伝』ほどではないが歴史の享楽を明らかにしたところに『太平記』の魅力がある。解釈を拒む享楽といってもよい。道誉や師直の享楽はどのような教訓も語りはしないからである。それに対して、『平家物語』は歴史を情動化し続ける装置である。知盛の言葉が示すように、歴史を共同体の運命と同一化している。

覚一本『平家物語』に一例のみ『太平記』に頻出する「からから」笑い、覚一本『平家物語』に用例がなく『太平記』に頻出する「結句」などは作品の特質を示すものと考えられる。